

東大文

SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Culture
セインズベリー日本藝術研究所

平成27年度

文学部冬期特別プログラム

2016年2月13日-26日

報告書

Report on 2015 Special Winter Program
at the Faculty of Letters

February 13-26, 2016 in the United Kingdom



THE UNIVERSITY OF TOKYO

目次

1. 巻頭挨拶

- 東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 熊野純彦 2
セインズベリー日本藝術研究所 統括役所長 水鳥真美 3

2. ウィンタープログラムの概要 4

3. プログラム実施内容 5

4. 参加者レポート

1. Frances Iddon【University of East Anglia】 9
2. Frederick van Randwyck【University of York】 14
3. Harry Richardson【University of Reading】 18
4. Sabrina Fantuzzi【University of Zurich】 22
5. Stephanie Pirk【University of Tübingen】 29
6. 大木 滉平【教養学部1年】 33
7. 佐川 未来【文学部3年】 36
8. 氷見野 夏子【文学部3年】 40
9. 前原 晏梨【教養学部2年】 43
10. 湯浅 英俊【文学部4年】 47

5. 総括

初めてのウィンター・プログラム

- 東京大学大学院人文社会系研究科・副研究科長 佐藤宏之 53



北村咲子撮影

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

熊野純彦

旧常呂町には、北海道ばかりでなく、サハリン・ロシア極東地域にまでひろがる北海文化の豊富な遺跡がのこされている。このことを最初に発見したのは、常呂町在住の方であった。いくつかの偶然も介して、東京大学文学部の考古学研究室を中心とする研究活動が、かの地で開始されたのは、およそ半世紀の時をさかのぼる、1950年代からのことである。1973年、大学院人文科学研究科（当時）ならびに文学部は、常呂町に附属北海文化研究常呂実習施設を開設し、同施設は、旧常呂町（現北見市常呂町）を中心とする地域連携の拠点ともなっており、現在にいたっている。

ここに纏められたのは、夏季にくわえて、冬季プログラムを実施した、その結果の報告である。今回のウィンタープログラムにかんしては、イギリス連合王国ノリッチに所在する、セインズベリー日本藝術研究所の全面的なご協力を忝くしている。

はじめにするしたとおり、常呂町にひろがっているのは、サハリン・ロシア極東地域にまでおよぶ北海文化の、貴重かつ豊富な遺跡である。現在の国家や国境がなおその意味をもつに先だって展開された先人たちの生の痕跡が、北の海から打ちよせ、吹きよせる波と風、厳しくも豊かな北の大地の一隅にひろがっている。そこでいまなお確認されるのは、この地上におけるひとの生が紡ぎだした、ミニマムな、とはいえまた多様な暮らしが刻みこんだ軌跡である。遺されているのはまた、すでに精緻をきわめた技巧の所産であり、ひとがこの世を超えたものに寄せていた思いのかけらたちでもある。

北海道の冬は、なべて厳しい。わけても常呂の冬は、流氷のうえをすべって辿りついた寒風が容赦なく吹きつける、漆黒の海に面して、ときに生きとし生けるものを凍りつかせる。冬期特別プログラムはまた、いつでもかわらず暖かなおもぎしを示すわけではない、自然のただなかに佇み思う機会を参加者各位に与えることとなったはずである。

若い感性が、国家成立以前のひとの生の息吹きを感じ、ひとびとが共に生を織りあげるとなみが自然のうちに刻印したものにふれて、現在の世界のかたちを考え、未来の生のすがたに思いをめぐらせることを期待してやまない。同時にまた、覚書に基づくこの国際交流が未永くつづくことを祈念している。



セインズベリー日本藝術研究所 統括役所長

水鳥 真美

東京大学の学部生を英国に迎えた第一回冬期特別プログラムが無事実施され、いよいよ双方向の国際交流が始まった。今回のプログラムに参加した学生は日本から5名、英国・欧州から5名のみ。規模が小さいとの印象を持つ人も多いだろう。企画した側としても準備も含めて要した手間暇を考えると1回に10名しか裨益できないのは、もったいないかなどの思いもよぎる。しかし、真に学生諸君の人格識見にインパクトを与え、キャリア形成に役立つ体験は、たとえ贅沢と言われても、これくらいの規模でなくては味わえないのではないだろうか。

イングランド各地を巡ったプログラムは、ストーンヘンジをはじめとする数多くの歴史遺跡の視察、現場でこれらの史跡の研究、維持管理に携わる人々の話をきく豊富な機会、そして、セインズベリー日本藝術研究所の研究者からの講義と盛りだくさんだった。そこから何を学んだかは、参加者にきいてみるしかない。新たな知識の蓄積にとどまらず、ものの見方、思考の展開、表現力などを向上させていく上でのヒントを得られたとしたら、まずまずの成果をあげたと言えよう。

このプログラムは、少なくとも後3年続けていきたい。内容を更に充実するためにも、参加者各位からの忌憚のない感想をお待ちしている。

- 実施期間** ● 2016年2月13日(土)～26日(金)
(事前のオンライン講座:2016年1月11日(月)からの5週間で受講)
- 内容** ● 前半:ロンドンおよびイングランド南西部でのプログラム(2月13日～2月18日)
 ▶ 博物館・美術館等の見学
 大英博物館、テートブリテン、ロンドン博物館、ウィルトシャー博物館、
 チャーチル博物館・内閣戦時執務室、デニス・セヴァーズ・ハウス
 ▶ 史跡等の見学
 ストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡、ローマン・バス遺跡、
 ウェストミンスター寺院、ロンドン・ローマ円形劇場
 ▶ 発掘中の遺跡の見学
 ロンドン博物館考古学ユニットによるロンドンシティ内遺跡
 ▶ 歴史的都市の見学
 ロンドン、パース
 ▶ その他
 ロンドン大学 UCL のキャンパス見学
 後半:ノリッチおよびノーフォーク州各地でのプログラム(2月19日～26日)
 ▶ 博物館・美術館等の見学
 ノリッチ城博物館、セットフォード博物館、セインズベリー視覚芸術センター
 ▶ 史跡等の見学
 ノリッチ大聖堂、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、ブランカスター海岸、
 ブラノドゥヌム遺跡、ハンスタントン海岸、ウォーラムキャンプ・ヒルフォート、
 サンドリングラム宮殿、ケスター遺跡、セットフォード・フォレストのウォレン遺跡、
 グライムズ・グレイヴス遺跡、サットン・フー遺跡
 ▶ 発掘中の遺跡の見学
 マストファーム遺跡
 ▶ 講義・実習
 ・セインズベリー日本藝術研究所での歴史遺産に関する講義、グループ発表
 ・ノーフォーク州歴史環境事業本部での考古学講義、実習
 ・セットフォード・フォレスト内の墳墓の測量体験
 ▶ 歴史的都市の見学
 ノリッチ、キングスリン
 ▶ その他
 イーストアングリア大学の訪問、キャンパス見学
- 担当講師** ● サム・ニクソン(セインズベリー日本藝術研究所 上級研究員)
 サイモン・ケイナー(セインズベリー日本藝術研究所 考古・文化遺産学センター長)
- 東京大学参加学生の募集方法等** ● 2015年10月に東京大学文学部の website 等で告知、募集開始
 参加申込者に対し書類選考の後、11月に申込者に通知。
- 受講者** ● 東京大学学部前期および後期課程学生5名
 セインズベリー日本藝術研究所において選考した英欧からの外国人学生5名
- 支援者** ● 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授1名 特任助教1名
 同 事務職員3名
 シャーロット・バタスビー(セインズベリー日本藝術研究所 アシスタント)

事前のオンライン講座

プログラム受講者は全員、セインズベリー日本藝術研究所が準備した事前のオンライン講座を受けた。このオンライン講座は、英国滞在中に学ぶ事柄についての基本知識や用語、また訪問する場所の内容を効率的に学ぶことを目的としており、週ごとに約2時間費やしなが、各人が都合の良い時間にオンラインで受講できる形式をとった。講座は5週間にわたり、すべて英語で行われた。毎週、理解を確認するためのミニテストも行われた。

前半の部

プログラムの前半では、主にロンドンに滞在しながら、同市の歴史文化遺産の多様性の理解に努めた。プログラム初日に受講者は大英博物館に現地集合し、その後数日かけてさまざまな博物館・美術館、史跡などを見て回った。途中、セインズベリー日本藝術研究所の水鳥真美統括役所長より歓迎の言葉を頂いた。大英博物館では学芸員2名が応接してくれ、普段は目にすることのできない貴重な遺物を直接手に取りながら学習した。バスを使って一泊二日でイングランド南西部をめぐる遠足も行った。東京大学からの参加学生は、英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら交流を進めた。

● 博物館・美術館での見学実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であるため、ロンドン滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。大英博物館では収蔵資料に関する講義・実習を行った。学芸員指導のもと、歴史資料（土器、青銅器、陶磁器等）の取扱い方法、展示技術等を、実物の資料に接しながら学んだ。ロンドン博物館では、ロンドンの歴史遺産についての素養を深めた。テートブリテンでは、「自然とノスタルジア」をテーマにした展示を中心に観覧し、英国の原風景の表現方法に関しての理解を深めた。この他にロンドンでは、チャーチル博物館・内閣戦時執務室や、デニス・セヴァーズ・ハウス等を訪れた。また、ディヴァイジーズのウィルトシャー博物館では、ストーンヘンジ等に関連した考古遺物について学んだ。各博物館・美術館における展示方法は多種多様で、受講者は学芸員との議論を通じて、その意図や方針等をその都度確認し、知見を広げることができた。



大英博物館

● 史跡等の見学

歴史を学ぶ上では、博物館・美術館資料だけではなく、実際の地理的背景との結びつきを考慮することが重要になる。そのような認識に基づき、ロンドン滞在中は、イングランド南西部の歴史文化遺産を訪問する機会を積極的に設定した。ウィルトシャー州に所在する世界的に著名なストーンヘンジ、エーヴベリー遺跡を訪問し、新石器時代の文化や生業、ランドスケープ等について学んだ。また、これらの史跡では、訪問者へのアプローチ方法や展示物の構成等の違いについても議論を行い、理解を深めた。この他に、サマセット州バー



ストーンヘンジ

スを訪問し、ローマン・バス遺跡等の歴史文化遺産を見学した。受講者間では、日本と英国の入浴文化について話題となり、文化交流の一助となっていた。ロンドンでは、ウェストミンスター寺院等を訪問し、英国の歴史に

ついて理解を深めた。

●発掘中の遺跡見学

ロンドン博物館考古学ユニットの協力により、現在発掘が進められているロンドンシティ内遺跡の見学を行った。遺跡では、考古学の調査方法を学ぶとともに、ロンドン博物館考古学ユニットの調査体制や活動内容、緊急調査に際しての遺跡保存の在り方等について解説を受けた。その後、実際にロンドン市内で保存されているロンドン・ローマ円形劇場等を巡って、歴史文化遺産の価値や存在意義について理解を深めた。ロンドンで発掘された遺跡が、今日までどのように社会的に受容され、また保存されるに至ったのかを直接体験しながら学ぶ良い機会となった。



ロンドンシティ内の遺跡現場

後半の部

プログラムの後半では、拠点をノリッチに移して、ノーフォーク州の歴史文化遺産について学習した。後半初日にはセインズベリー日本藝術研究所を訪問し、サイモン・ケイナー博士より歓迎の言葉を頂いた。その後、州都ノリッチを含めたノーフォーク州の歴史的環境を現地訪問しながら学んだ。セインズベリー日本藝術研究所では歴史遺産に関する講義を受け、また受講者たちによるグループ発表も行われた。セットフォード・フォレストを訪問した際には、発掘前の墳墓遺跡における測量調査を体験した。ノリッチ滞在中も、東京大学からの参加学生は英国・欧州の学生と食事と宿泊を共にしながら親交を深めた。

●博物館・美術館での見学実習

プログラム後半では、ノリッチ近隣の博物館・美術館を積極的に訪問した。ノリッチ城博物館では、ノリッチ城の歴史や、ノーフォーク州の歴史と自然に関して学んだ。セットフォード博物館では、グライムズ・グレイヴス遺跡等の展示を見学した。ノーフォーク州セットフォードを中心とするブレックランドは、長野県長和町と、遺跡を中心とした国際交流を行っており、それらに関連した展示や活動等についても説明を受けた。イーストアングリア大学を訪問した際には、セインズベリー視覚芸術センターを訪問し、世界的に収集されたコレクションを見学した。



ノリッチ城博物館

●史跡等の見学

ノリッチ滞在中は、近隣地域の歴史文化遺産等をバスで巡った。訪問した史跡は、ノリッチ大聖堂、ヘイズバラ遺跡、ウエストラントン海岸、ブランカスター海岸、ブラノドゥヌム遺跡、ハンスタントン海岸、ウォーラムキャンプ・シルフォート、サンドリングラム宮殿、ケスター遺跡、セットフォード・フォレストのウォレン遺跡、グライムズ・グレイヴス遺跡、サットン・フー遺跡等である。グライムズ・グレイヴス遺跡では、学芸員の案内のもと、新石器時代のフリント採掘坑を見学し、



サットン・フー遺跡

当時の人々の暮らしぶりに思いを馳せた。また、ケスター遺跡、サットン・フー遺跡では、発掘を担当された方から直接説明を受けることができ、貴重な機会となった。

●発掘中の遺跡見学

ケンブリッジシャー州ホイットルシーに所在するマストファーム遺跡を見学した。マストファーム遺跡は、青銅器時代の遺跡で、非常に保存状態の良いことから「英国のポンペイ」と称されている。訪問日には、木製の車輪がほぼ完全な形で発見され、発掘現場の興奮と緊張感を体験できた。



マストファーム遺跡

●遺跡の測量体験

セツフォード・フォレスト内に所在する墳墓遺跡の測量を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。担当講師の指導のもと、オートレベルや標尺を用いて墳墓の計測を実施した。考古学の調査に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。



墳墓遺跡の測量体験

●遺跡調査の講義

遺跡調査は発掘・報告だけではなく、その後の保存や活用も重要になる。ノーフォーク州歴史環境事業本部では、遺跡の調査方法や遺物に関する講義とあわせて、遺跡記録の保管状況やデータベース等を見学実習した。また、ケスター遺跡訪問時には、調査員の方と、日本と英国の遺跡調査の違いについて議論した。本プログラムでは、発掘中の遺跡見学、測量体験、遺跡調査の講義を通して、調査全体を模擬学習することができた。



ノーフォーク州歴史環境事業本部

●歴史遺産に関するグループ発表

セインズベリー日本藝術研究所で、歴史文化遺産に関するグループ発表・討論を行った。受講者は3グループに分かれて、それぞれの課題について、英語で5分間の口頭発表を行った。各グループには、東京大学と外国人学生とが混ざるように配分し、英語での交流が活発に行われた。議論の内容は、英国で見学した博物館の学術的・社会的役割の違いや、文化遺産の歴史的価値や背景、展示・解説方法等、多岐にわたる。また、発表後には担当講師が講評を行った。



グループ発表・討論



● Day 1 — 13th February

On the first day of the Winter Programme we met in the Great Court of the British Museum, and we all just about managed to introduce ourselves despite the surrounding weekend visitors. Sam delivered an introductory tour to some of the British Museum collections and some of the highlights were visiting the Parthenon Marbles and the Ancient Egyptian collections. We discussed issues surrounding the presentation of different cultures' archaeology and historical objects, such as the political intricacies of the British Museum holding the material despite appeals for many of the objects to be returned to their native country. The culmination of this was the development of an idea of the British Museum attempting to present itself as much more than its title suggests; it views itself as a representative for not only British archaeology, heritage and history but as a world representative, able to care for these objects with the most attention. Whether this self-designated role is ethically justified was a question much debated. Following this we arrived at the Bedford Hotel and checked into our rooms. This gave us a chance to get to know our roommates from the University of Tokyo, before heading downstairs with everyone for dinner at the North Sea Fish restaurant. We had the traditional English dish of Fish and Chips for dinner, to introduce the international students to arguably the signature national dish.

● Day 2 — 14th February

We began this day with a bus tour of London, however most of us huddled under the covered section due to some unfortunate, yet fittingly traditional, British weather. We passed many historic sites including skyscrapers such as the Shard and the 'Gherkin' as well as the site of public hangings and St. Paul's Cathedral. Later in the day we continued our tour of the landscape of London via a river boat cruise along the Thames, with some interesting tour guide commentary. The sites that seemed to attract the most attention were Buckingham Palace, the Houses of Parliament, Big Ben and the London Eye. Perhaps this is due to their consistency within the London landscape, as well as connections between the power base in Britain, such as the Royal family and the government, and their historic and iconic architectural representatives. Then we visited Tate Britain and we were introduced to the landscapes of Constable. We used these to better our understanding of the romantic, nostalgic ideals of the landscape conjured in the 18th and 19th centuries. They were also useful as a comparison for the current London landscape. Parks and green sites are an ever decreasing but desired feature of the modern landscape, as they evoke, even now, the images of the English countryside in the centre of an expanding metropolis. We finished the day with dinner at the Norfolk Arms, in which we had a delicious, if not entirely traditional, pub meal of mushroom pasta.

● Day 3 — 15th February

We started Monday with a tour of the Bloomsbury area, visiting the park and exploring the square composition of its layout. We were able to see some of the University buildings within this area and even visit the body of Jeremy Bentham within University College London. This was followed by a behind the scenes visit to the British Museum headed up by Nicole Rousmaniere and Neil Wilkin. We were introduced to some fantastic Japanese photographs by Ishimoto Yasuhiro and were able to examine a rare Shogun scroll, as well as handle Japanese ceramics and Jomon pottery. This was a rare and honoured opportunity, and almost immediately followed by our handling of Bronze Age weapons and golden torcs. We then headed to the Museum of London and were given a tour of the exhibits such as their own prehistoric collection, the pleasure gardens, the London Olympic 2012 cauldron and the Lord Mayors carriage. The difference between these two museums was quite evident. The British Museum is far more reserved, presenting their items as the main point of interest with not additional material. The museum is presented as a collection we are able to witness but not touch. The Museum of London was far more interactive, their material objects were not as extensive or impressive and so they used representational pieces to create an image of the past for visitors. However, whether this image is

accurate as it is designed by the curators is up for debate. Perhaps the British Museum allows you to find your own interpretation. I think these two approaches are related to the audiences they are presenting to. The British Museum is a centre of world heritage and culture that attracts a world audience; it perhaps presumes some prior historical knowledge and so visitors are more likely to be educated in certain areas before visiting. The Museum of London is aimed primarily at children and families and is centred around the local area. Therefore it is not appealing to an academic audience or performing on a world stage, it is catered towards younger visitors and therefore its exhibits are simpler and more interactive. Where the British Museum is a collection, the Museum of London is an attraction. This day was finished off with one of the highlights of our dining experience during the trip, Chilli Cool, an authentic Chinese restaurant. All of the students shared dishes and it was a really fun evening in which everyone bonded and really got to know each other.

●Day 4 — 16th February

On the fourth day of the trip we visited Stonehenge and were given an introduction and a tour around the visitor centre by a volunteer. This included seeing a reconstruction of a typical house from this era and trying on some of the standard dress! We then proceeded to the monument itself, and despite the amount of people posing for the camera I managed to take a few photos of the monument in the landscape. After lunch we arrived at Avebury and went to explore the great circular monument in small groups, which included a lot of silliness and touching of the stones. In contrast to Stonehenge, Avebury was a very independent visitor site. It was simply presented as a monument that was integrated into part of the village, something you could interact with and explore at your own pace. However Stonehenge was a much more rigorous and organised operation, with guides, a visitor centre and information boards everywhere. Despite the higher quality level of information and visitor services, the monument remained behind a fence and we were unable to touch it. After we explored this contrast we had an 'after-hours' tour of the Wiltshire Museum and learnt about museum structure and funding. The museum was impressive, with expert lighting, a good range of objects and a structured layout. We discussed the ways in which staff were attempting to put Wiltshire on the map as a visitor attraction alongside Stonehenge, as well as promising to tweet about them on social media! For dinner we enjoyed mezze platters of prehistoric inspired food before settling into our new hotel in Devizes.

●Day 5 — 17th February

On Wednesday we headed to the historic city of Bath and started our day with the visit to the biggest attraction - the Roman Baths. We wandered past the great baths and the hot springs and I really enjoyed reading the cursed tablets of unhappy citizens. We were also able to taste water from the spring, which had an impressive amount of mineral content but unfortunately not a very appetising flavour! I also got to briefly interview a 'Roman citizen' (his credential were questionable) about his experience of bathing; he was quite rude and this proved hilarious to all of the students. An interesting aspect of the heritage site was that the museum focused on the Roman story and that of Bath, but not of the wider British connection to the invasion of the Romans. It was a really interesting audio tour; however we did not get a bigger picture of the historical context. A lot of the baths had also been reconstructed in modern times and this was not mentioned clearly. In the afternoon it began to rain heavily but we set off in earnest for our walking tour of Bath, with a very enthusiastic tour guide. She took us to some magnificent examples of Georgian buildings and in relation to this we discussed how there is a tradition in British architecture to look to older models, such as the neoclassical, for more recent structures. We had a short pit stop to dry off and have a slice of cake; during this time we talked some more about the attraction of Bath to visitors. The educational aspects, beautiful architectural design, attractions such as the Roman Baths and World Heritage status all combined to make the city a stop for international tourists outside of London. The urge to visit Bath I believe definitely originates in the presentation of itself as a 'heritage' city, a site of historical and

architectural worth. After this we endured a gruelling four hour coach trip back to the Bedford Hotel and all ate some dinner in the on-site restaurant before quickly crawling into bed.

● Day 6 — 18th February

On this morning we went first to Westminster Abbey and were able to view the tombs and graves of a variety of royals, members of the nobility and writers. I spent a long time discovering all of the political and literary figures I had knowledge of, and that rested in the splendid structure of the Abbey. After this we continued to the Churchill War Rooms and discovered more about the daily lives of those living and working in the underground complex during World War II. This presented the war in a very positive light, focusing on the characters from within the bunker and less on the wider political and social disaster outside of it. It had a very narrow path through the bunkers and lots of reconstructions of bedrooms and war rooms to look in on but all behind glass and accompanied by wall text and an audio tour. Dennis Severs' House was next on our agenda and we spent the first part of our afternoon exploring the darkened house in silence, climbing the creaky stairs to the top of the building. Each room was carefully reconstructed to give a sense of feeling of life in the 18th-20th century. It follows a family of Huguenot silk weavers; however, the lack of any information apart from a few lines of poetry scattered about the house made this very difficult to understand. I think the most attractive feature for visitors is the sensory experience provided, the smells, sounds, sights and objects within the house all build up an undeniably realistic atmosphere. Whereas Westminster Abbey told the story of specific and very famous figures from throughout history, the Dennis Severs' House gave us a more general experience of normal family life and conditions over a couple of centuries. The third activity for the day was a visit to the site of a Museum of London Archaeology (MOLA) excavation. We were able to view ongoing work at the site and ask questions about the nature of commercial archaeology. It was interesting to find out more about the involvement of the developer within the process and the private sector of archaeology in the UK. There is a huge competition between archaeology firms to work on sites and the high costs of such work means the developer often selects the quickest or the cheapest firm, rather than the one able to conduct the highest quality archaeological work. It lent a new perspective on excavation. As many businesses and institutions see the archaeology as not an exciting discovery, but as time-consuming and a waste of money and resources.

● Day 7 — 19th February

On the first Friday of the programme we began our journey back to Norwich, but on the way we stopped off at currently one of the most important archaeological sites in the UK - Must Farm. We were able to see the structure of the wooden round houses burnt down in a fire and then sunken into the mud below., although perhaps the most exciting thing we saw was the earliest complete wooden wheel ever found in Britain, an extraordinary object for the UK. We were able to see some of the pieces of pottery and even burnt food remains with a spoon still inserted from the Bronze Age! This kind of excavation was remarkably different to those we witnessed in London with MOLA. There were far fewer people on site, they were working much more slowly and carefully and the finds were much more extensive and important. This is in part due to the time constraints of commercial archaeology and the pressure from the developer to finish faster, allowing for less meticulous archaeological work. After lunch we arrived at our hotel in Norwich and then we headed to the Sainsbury Institute for an orientation talk by Dr Simon Kaner, as well as some mid afternoon tea and biscuits. During this we delivered our short group presentation on one of the daily questions from our itinerary booklet; unfortunately my group did not win the competition but I was very impressed with the quality of all the students information and delivery. In the evening we all ate at a Spanish tapas restaurant together and the food was incredible; everybody agreed it was the best restaurant we had been to all week.

● **Day 8 — 20th February**

On our first official day in Norwich we visited the University of East Anglia and the Sainsbury Centre for Visual Arts (SCVA), my own university and department building. Our first stop was The Enterprise Building, a new environmentally friendly structure made using hay as a building material. We discussed the use of hay and wood in newer buildings such as this and how it could be said to reference to traditional building materials and methods, such as in Japan where a huge amount of historical structures were wooden. This idea of a heritage structure was contrasted with the buildings status as an experimental and undeniably modern concept, used as a show piece for companies interested in investing in similar projects in the future. We continued along the walkway and talked about how the concrete brutalism of the campus has been embraced by students and staff alike, the Ziggurats designed by Denys Lasdun even being designated a Grade II listed building. The modern nature of the campus does not undermine its historical worth as an architectural record of style. We also stopped at the SCVA and visited the incredible collection of ethnographic material and 19th and 20th century painters. The buildings light and open design and impressive architecture was commented upon as well as the fact that Norman Foster designed the building in the 1970s yet it looks contemporary, as if it was built very recently. We then took part in a heritage talk and tour of Norwich with Michael Loveday, who introduced us to heritage branding. Features such as the 'Norwich Lanes', the Dragon Festival and the Forum all had a team of dedicated people behind them to create a more attractive visitor experience. This contrast between the historic idea of Norwich and these newer modern building creates a carefully crafted image of Norwich as both a heritage based town that is still expanding and growing with new life and projects ongoing. We finished the evening with dinner in the library restaurant, joined by Michael Loveday and some more of his affectionate anecdotes of Norwich.

● **Day 9 — 21st February**

We had a very busy Sunday visiting a huge variety of sites up and down the Norfolk coast including Happisburgh, Warham Camp Iron Age Hill Fort, Hunstanton Beach, Brancaster Roman Fort, West Runton, Sandringham Estate and King's Lynn. Many of these places were sites of archaeological importance e.g. the earliest footprints outside of Africa found at Happisburgh and nearly a whole mammoth unearthed at Hunstanton beach. However, they were not very well advertised and they were definitely not visitor friendly. Little to no information was provided, there existed no visitor centre or guides, no travel links to and from the sites, no phone or Wi-Fi signal and no markers of where the archaeological material had been found. At the beginning of this whistle stop tour we had a talk by Andrew Hutcheson who mentioned their beginning of the branding of Happisburgh as the 'Deep History Coast', similar to that of the 'Jurassic Coast'. We used this platform to discuss some ideas about how we would brand these sites and make it a destination spot for visitors of Norfolk and London. I personally felt that the items along the coast could be highlighted with information and reconstructions to create a trail along the beach. A wider concept I think would be good to develop is links between all of these smaller sites, to create one brand and image of the Deep History Coast and to create a support system for each of the sites throughout Norfolk. We had a roast Sunday lunch at Holkham before having a tour of the historic sites within Kings Lynn and its connection with its port. On the menu for dinner, for the second time, was fish and chips and it managed to complete a day of very traditional British food.

● **Day 10 — 22nd February**

We started the day with a tour of the Norwich Castle Museum with Paris Agar, in which we heard about the Castle Keep Project, a new development plan for rebuilding the original castle floor. We later had time to explore the collections alone, which I found to be very busy and confused. There were many different exciting themes but all mixed up into one, however, the art galleries were a particular highlight - especially the collection of Dutch

paintings. In the afternoon we visited Caistor Roman Town (Venta Icenorum) and met Dr Will Bowden for a tour of the site. Despite the lack of archaeological material the site was impressive, with sleek and stylish information boards, a clear track set around the site and an interactive virtual reality app. This made the information on the site accessible and attractive to visitors and allows them some visualisation of the site as it may have looked a long time ago. Following this Andrew Ray gave a talk and gave us some idea of the involvement of communities within archaeological work and he attempted to compare this with the situation in Japan. The demographic of volunteers consisted mainly of students and retired people, where as Japanese archaeological projects involve more adults. The extent to which volunteers can get involved was also discussed, with the Caistor Roman project building up archaeological skills in community members. This meant that eventually such projects could function independently of archaeological or council organisations as volunteers were involved in all aspects of fieldwork. That evening we had dinner at the Belgian Monk, which consisted of some great tasting beers and a whole cauldron full of mussels!

● Day 11 — 23rd February

We started the day by driving up to the headquarters of the Norfolk Historic Environment Service (HES) at Gressenhall where we had a talk by David Gurney on the work that the service conduct and their relationship with the county council. Next was a follow up talk by Heather Hamilton on the Historic Environment Records (HER) database and aerial photographic library, alongside a discussion about the Portable Antiquities Scheme (PAS). The presence of an archaeologist and metal detectorist both working for the HES allowed us to explore different experiences of the PAS system. It seemed to unite both perspectives and allowed for finds to be recorded for the database and mapped carefully to recreate the context. We then travelled to Thetford forest with David to meet Rachel Riley and Anne Mason, who showed us the archaeological evidence of medieval rabbit warrens and two possible burial mounds they were hoping to excavate. We were then able to do a dumpy level survey, led by Claire Bradshaw, on one of the mounds in two teams to gain some field practice knowledge and to create a record of the two features in the landscape. Our time in Thetford Forest allowed me to experience an organisation, the Forestry Commission, working alongside the HER to care for the archaeology on their land. It was an excellent example of a working partnership to preserve heritage within the landscape. After this we had afternoon tea, followed by dinner at Lyndford Hall in a very elaborate dining room, before heading back to Norwich for the final phase of the programme.

●Day 1 — 13th February

We met for the first time as a group at the British Museum. We then had a tour of the Museum highlights with focus on the Elgin Marbles, Benin Metal works and the Egypt Galleries, with information on Egypt provided by Charlotte Battersby who has an interest in Egyptology.

The British Museum presents itself as representative of British interpretations of other cultures. Funded by the government, the museum presents artefacts and displays that are relatable to British people and the former Empire.

On the subject of 'The Marbles Questions' Hidetoshi relates the issue to the many Japanese artefacts taken to America after the War and have not been returned and as such believes the marbles should be returned as long as they can be cared for.

●Day 2 — 14th February

In the morning we took a bus tour of London, which was a great way of seeing many of London's sights in a short amount of time. In the afternoon we took a boat trip down the river, which was limited in how much we were able to see. We then visited the Tate Britain and made comparisons to the Tate Modern that we had briefly visited in the morning.

Many of the sites are constantly modernising themselves to stay relevant with current consumer attitudes. While many tourists come to visit London's historic sites, the more popular sites are advertised as more modern. While the Tate Britain houses arguably more famous works of art, the Tate Modern receives more visitors due to its relevance with current tourists.

Hidetoshi confirmed the appeal of a more modern attraction to foreign tourists. Although I learned a lot from talking to him about the evolution of Japanese art styles as influenced by its periods of history and the influence of Europeans on Japanese art after the Meiji Restoration

●Day 3 — 15th February

Before we went to the British Museum, Dr Nixon took us around the area of Bloomsbury. This involved a tour of the local parks and the central area of University College London as well as a brief history of architectural design in London. At the British Museum Dr Nicole Rousmaniere gave us exclusive access to special Japanese artefacts and art scrolls. After lunch we were taken to the digital department of the museum and showed by Dr Neil Wilkin how the museum is using 3D printing and digital scanning as a way to present artefacts to the public. We then headed to the Museum of London, where we were shown around the museum.

Whereas the British Museum presents artefacts in cases with descriptions, the Museum of London presents interpretations and reconstructions alongside their artefacts. These interpretations of artefacts are deliberately aimed at appealing to children and to engage young people with history and archaeology, with emphasis on areas of history that are covered in the national curriculum. While this interpretive presentation of objects in the Museum of London does help to engage children in history, the downside to this is that it gives the subjective one-sided interpretation of London's archaeology to visitors.

However, while I felt that the British Museum provided a better objective presentation of archaeological artefacts, Hidetoshi presented a case for the display type seen in the Museum of London since foreign visitors can much more easily understand the history behind many of the artefacts with the aid of the images and historical reconstructions seen in the Museum of London.

●Day 4 — 16th February

After leaving early from London, we arrived at the site of Stonehenge at around 10 o'clock. A volunteer guide then gave us a tour of the new visitor centre before we caught a shuttle bus to the site of Stonehenge itself. In

the afternoon we went and walked around the site of Avebury with a brief stop at Silbury Hill. In the evening we were kindly given an 'after hours' tour of the Wiltshire Museum by David Dawson, the museum director.

The sites of Stonehenge and Avebury provided contrasting experiences of how prehistoric sites are presented to the public. Whereas Stonehenge is a protected World Heritage site, Avebury is open for all the public to engage and make contact with the monuments. It is interesting to see how an interpretation is provided for the site of Stonehenge, however Avebury is left without displayed interpretations for the public and therefore void of biased viewing of the site. While it is beneficial for the site of Avebury to be open for the public to engage with the stones, this does mean that the site is not as protected as Stonehenge. Already parts of Avebury have had to be closed due to tourist erosion and it seems as though, with the increasing popularity of Avebury, a similar set up will likely be put in place to preserve the site. The Wiltshire Museum provided us with an experience of how the finds of the prehistoric area around Salisbury Plain are exhibited and how the Museum is trying to attract the public to its doors in the wake of funding cuts.

● Day 5 — 17th February

From the Bear Hotel in Devizes we made our way to Bath, where we visited the famous Roman Baths. After an audio tour of the site we met up with a city tour guide, who gave us a tour of Bath and gave us an explanation as to Bath's significance during the Georgian era. Despite the rain our guide did an excellent job at keeping us all engaged with the city's history and her experience as a Bath guide, but also as someone who gives 'beyond barriers' tours of Stonehenge.

Bath is one of the few places in the UK where there are hot springs and as a result deserves its place as one of the only 30 city World Heritage sites. The Roman Baths, from where the city gets its name, are an easy selling point for tourists coming to the city. However the Baths lack any context to the period of Roman rule. While the audio guide provides a great description of what is displayed, the lack of a guide means that any questions that one has cannot be answered. The Baths also give little information as to the Roman invasion of Britain and of the historic context of the site of the Baths before and after the Roman Conquest. While the appeal of the Romans and the Georgian heritage is very important in bringing tourists to Bath, the rest of Bath's history is pushed to the sideline and many amazing sites, such as the church with its climbing angels, are not as visited by tourists due to a lack of publicity.

● Day 6 — 18th February

We visited Westminster Abbey and the Churchill War Rooms in the morning and after a cold Wasabi bento we visited Dennis Severs' House. Afterwards we were shown around a Museum of London Archaeology (MOLA) excavation with a quick visit to a hairdressers and the City of London Museum to see a Roman fort and amphitheatre respectively.

Westminster Abbey and the Churchill War Rooms are easy attractions to sell to the public as they are symbolic with British history and Winston Churchill and the Royal family are well known throughout Britain and the world. The Dennis Severs' House however is not a tourist attraction and is not widely advertised in the centre of London's financial district. The house was not clearly presented to visitors and without prior knowledge of the intentions that Dennis Severs' House tried to provide, the attraction was confusing and hard to understand, a view that Hidetoshi and many of the other students, European as well as Japanese, confirmed.

It was a privilege to experience a MOLA excavation since these are not designed to be visited by the public. Many methods are even designed to prevent public engagement, including high walls and security guards. The opportunity to be shown around is one that very few people will be able to have and the visit to the Roman Fort and amphitheatre highlighted the constant struggle of preserving and displaying archaeology in London.

● **Day 7 — 19th February**

As phase one of the programme finished, we departed for Norwich. On the way we stopped off at Must Farm and had a guided tour of the archaeological site. The day of our visit happened to coincide with the press release of the wheel on the site, which is believed to be the oldest intact wheel in Britain. We then arrived in Norwich and were welcomed into the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, where we had to make a presentation in front of all the other students. While the excavations at Must Farm were originally financed by a company, who wanted to use the site, there is more co-operation between contractor and excavators due mainly to the historical significance of the site. Since what was found at Must Farm is of such importance to British heritage the excavation team has allowed the public to have tours of the place, whereas the MOLA excavations would not let the public view the site being excavated.

● **Day 8 — 20th February**

We toured the architectural marvel that is the University of East Anglia (UEA) campus and saw the architectural concept of Brutalism in all its glory. The tour culminated in a visit to the Sainsbury Centre for Visual Arts and lunch in the cafeteria. After lunch we had a brief visit to Norwich Cathedral, although we could only take photos if we paid a fee. The creator of the Norwich 12, Michael Loveday, then gave us a presentation and a guided tour of Norwich in the rain.

The main stand out attractions for those coming to Norwich, as tourists, are the Cathedral, which boasts the second highest spire in Britain, and the Norwich Castle Museum. These are incorporated into the Norwich 12, which provides tourists with an aim of visiting the best that Norwich has to offer in terms of heritage attractions. As well as the famous Norwich 12, Norwich is famous for its medieval street layout and Norwich heritage management have celebrated this the street layout through the advertisement of the Royal Arcade and the many murals and small statues that celebrate the past functions of the medieval streets.

● **Day 9 — 21st February**

Meeting up with Dr Andrew Hutcheson at Happisburgh we were given a presentation on the archaeology of the coast that has been revealed by erosion. He also presented his ideas for a historic trail along the seafront that, linked with other archaeological sites, is being presented as the 'Deep History Coast'. We then made our way to Warham Camp, the lowest Iron Age fort in Britain. After lunch at the Victoria Inn we visited Hunstanton beach, Brancaster Roman Fort and a drive through Sandringham Estate. Before dinner we were shown around the town of King's Lynn.

The main problem of heritage presentation and engagement with the public is that it is inaccessible and poorly presented. The sites of Warham Camp and of Happisburgh, while holding important archaeology and local heritage, are not easily accessible by main roads and coaches struggle on Norfolk's winding roads, as we found out at Happisburgh. The history of the area is also very poorly advertised. The signage for the Brancaster Roman Fort is poor and very little is provided to communicate its existence other than an information board on the site. With many of Britain's most important archaeological discoveries found in East Anglia there is a lot of potential for the 'Deep History Coast' to become a real tourist attraction, but this involves increased awareness of the heritage that is there and easier access for tourists.

● **Day 10 — 22nd February**

We were given a tour of the Norwich Castle Museum where we were shown a range of displays from the Iron Age to natural history. We were also given an idea of the potential changes that lottery funding would give to the museum and how that would affect the presentation of the Medieval Keep. We then headed to Caistor Roman Town and were given a tour of the site by Dr Will Bowden, who has excavated on the site, and Andrew Ray gave

us a presentation as to how they use community archaeology as a way of engaging the local population with the site.

Public engagement is key to creating an understanding of the history of the area to the local population. Projects, such as the community archaeology projects at Caistor, also help to create a sense of local connection with archaeology, which allows for the continued support for museums and archaeological sites. Access to archaeological interpretation of artefacts and sites are key to public engagement with heritage since very few tourists or members of the public are educated in archaeology and so visual interpretation of archaeology allows for the site to become relatable and thus understandable for them. Sites that are more easily understood are much easier to integrate into local communities and are much easier to create a local identity around than sites where information is not provided.

● Day 11 — 23rd February

We were privileged to have a private visit of Gressenhall, the headquarters of the Norfolk Environment Service. David Gurney and David Robertson gave us a presentation of the Service on the Portable Antiquities Scheme with Garry Crace. The presentation explained how the Norfolk Environment Service pioneered the Portable Antiquities Scheme with their close relationship to metal detectorists. We then travelled to High Lodge Visitor Centre at Thetford where we were given a brief history of the area, especially the warrens; the boundary of one we went and visited. We then helped to survey a Bronze Age burial mound in the middle of the forest, which is a place known for its tick populations.

Since the Norfolk Environment Service cannot feasibly discover all the archaeology in Norfolk, it relies heavily on members of the public to help discover new archaeological finds. The service then aims to educate members of the public by encouraging people who are interested in Archaeology, especially Metal Detectorists, to record their finds and to bring them into the Service so that a database of finds can be created. The databases established through local and national services are unique to Britain in the sense that all artefacts belong to the landowner and not to the state, such as is the case in Japan. This makes members of the public more willing to report finds since treasure is rewarded with money, both to the finder but also the landowner.

● Day 12 — 24th February

Visiting Thetford's Grime's Graves flint mines was a highlight of the trip. The opportunity of entering an ancient mine that very few people have entered since the Bronze Age was a remarkable experience even with the cramped space and bats flying round. The afternoon's tour of Norwich by Brian Ayres before the welcome reception at UEA was an insight into many of the historical properties of Norwich that many people overlook.

◎ Reflection ◎

From the Winter Programme the most important thing that I have learned is an appreciation for the amount of 'behind-the-scenes' work that is put into heritage sites. From the curators of museums to people who engage themselves in community archaeology projects and the Portable Antiquities Scheme there are so many passionate people that put so much into British heritage. I think this program has given me more of an appreciation of the way British heritage and archaeology is presented in this country and in the different way that they could be presented both to the local communities and to international tourists.

●Day 1 — 13th February

Our meeting place in the British Museum seemed appropriate for introducing students to heritage in Britain; a large task to be undertaken in just under two weeks. Proceeding through the galleries was a sure way of understanding the broad chronology of Britain, the range of which was reflected by the museum's hybridised architectural influences; from its neoclassical galleries and exterior to the modern Great Court. With its large ethnographic collections, the museum was also a good starting point for illustrating Britain's role in heritage internationally. Sam Nixon's discussion of these topics thus helped me to better consider the impact of the museum on Britain's heritage image. On this day I also met Kohei, the Tokyo student who would be my roommate for the remainder of the programme.

●Day 2 — 14th February

Taking an open-top bus and a river cruise as forms of commuting helped us to gain an impression of the scale of London, as well as becoming familiar with the city in a more general sense; from its most recognisable landmarks. These included the Tate Britain and the Tate Modern, which also served as good opportunities to discuss British art, in addition to how culture is portrayed in a wider sense. John Constable's works in particular fulfilled this role well, which were interpreted as a reaction to industrialism and urban expansion. During this visit, Anri mentioned that she liked the work of Pre-Raphaelite artists.

●Day 3 — 15th February

Of my days spent in London, I felt that I gained the most new knowledge from this one. Our visit to Bloomsbury revealed a monument dedicated to the earliest Japanese students at University College London, including Ito Hirobumi. My discussion of this period of history with Kohei was informative, and I found out about the significance of this act in defying the policy of the Shogunate. Our access to staff facilities at the British Museum allowed a more in-depth look at Japanese material culture with Nicole Rousmaniere, and relating this to Bronze Age artefacts presented by Neil Wilkin.

●Day 4 — 16th February

Temporarily leaving London, we travelled to the south-west of England to visit the two main archaeological sites that define the Wiltshire landscape; Avebury and Stonehenge. Covering both the Bronze Age and Neolithic phases of Britain, these sites were a great starting point to discuss some of the more recent developments in archaeological theory, such as Landscape archaeology, and thinking about how applicable they were to these similar yet contrasting sites. A particular comparison I liked was that of Silbury Hill to the contemporary mound-building culture in Japan, and how they may have served similar purposes. We were also interested in trying out some of the interactive displays, such as trying on prehistoric clothing and handling stone tools at Stonehenge. Hidetoshi mentioned that he preferred this kind of display in its educational value to some of the previous museum displays, which I found interesting.

●Day 5 — 17th February

On the last day of our south-west portion of the tour, we visited the city of Bath in order to understand its unique and profitable heritage industry. To do this, we took a walking tour and saw many Enlightenment-era areas of the city, as well as the famous Roman Baths. Out of the rain, the baths were a good chance to see many methods of public display in actions, ranging from labelled display cases to actors in period dress. Marcus the Roman was certainly informative, and we enjoyed filming interviews with him. Another experience was to try the natural spring water that Bath is so famous for; although Natsuko and Sabrina weren't great fans. It was definitely this diversity in presentation that reflected a commitment to maintaining public interest in local heritage.

● Day 6 — 18th February

On our final day in London, we visited a diversity of attractions including Westminster Abbey, the Churchill War Rooms and Dennis Severs' House. This allowed us to adopt more of an analytical approach, in reviewing the commitment of other organisations to public outreach. These seemed more appealing to particular groups; for instance, the lack of labelling and direction in the latter was probably directed to those disinterested in the traditional depictions of heritage. We also visited the Museum of London Archaeology excavations, which fitted nicely as a link between the discovery of material culture, to its eventual display. It was also a good example of a commercial archaeological unit that is typical of the UK, but is virtually unknown in Japan.

● Day 7 — 19th February

On our way to Norwich, we took the opportunity to introduce the historic landscape of East Anglia by visiting Must Farm Quarry; an incredibly important archaeological site for the Bronze Age, whilst it was still being excavated by Cambridge Archaeology. We were lucky to have received a guided tour, and many of us asked questions about their widely-publicised data. It was also interesting to compare a rescue excavation by a private unit to similar excavations in Japan, which according to Akira Matsuda are becoming less common. From our arrival in Norwich, we were soon given the task of summarising our experiences in the past week with a certain question in mind. In the setting of the Sainsbury Institute, my presentation with Anri and Stephanie was about how heritage areas are presented to tourists. We covered topics such as the presentation of Roman archaeology, as well as the comparison between Avebury and Stonehenge.

● Day 8 — 20th February

This day was a great opportunity to be introduced to the city of Norwich, an experience that was as new to me as it was to anyone else. This began at the University of East Anglia, courtesy of Sam and Akira who were already very familiar with the campus. It ended with lunch at the Sainsbury Centre for Visual Arts, a building which by itself served as an ample means for discussion about architectural style, as well as Art Nouveau due to the accompanying exhibition. Mike Loveday offered a talk about Norwich's extensive heritage projects, as well as a tour of the city. The main surprise to me was the number of churches that exist in the area, 36 in total. Kohei mentioned that Shinto temples in Japan are just as integrated into the community, although their role is more active in ritual.

● Day 9 — 21st February

We left Norwich to explore the wider East Anglia landscape, with the intention of being introduced to its rural and coastal aspects. Travelling from Happisburgh to King's Lynn, we spent an active day loosely tracing the heritage route rebranded the 'Deep History Coast', which took us via Warham Camp, Brancaster Roman Fort, Hunstanton beach and West Runton. Visiting multiple heritage locations, this was an opportunity to compare their presentation, evaluating their utilisation of signage, coastal paths and tourist information. Considering some of the more negative examples in these areas, such as Happisburgh beach and Brancaster, it was suggested that the fluctuating Norfolk landscape could explain a lack of archaeological investment in this region. Much of this was discussed over dinner in King's Lynn, whilst we also talked about learning new languages. Freddy, already fluent in Dutch, suggested a new app for this purpose.

● Day 10 — 22nd February

The next day featured a guided tour of the Norwich Castle and Art Gallery. Here we saw how displays were arranged according to the benefactors who donated them, which was an interesting comparison to the collections of the other museums we had previously visited. This was followed by a tour of the Roman town at

Caistor St Edmund, which really epitomised the meaning of community involvement in archaeology. Andrew Ray of the Caistor Roman Project presented their work, and it was intriguing to hear Akira's comparisons to public archaeology in Japan, particularly in the area of ownership of archaeological finds. The Caistor Augmented Reality app was also fun to use at the site, and allowed us to have an informative impression of what the town may have looked like at its peak.

● Day 11 — 23rd February

This day provided a nice chance to see the role of local government in conserving heritage. From their office at Gressenhall, a few representatives of the Norfolk Historic Environment Service including David Gurney offered their knowledge. Heather Hamilton discussed the use of aerial photography in the National Mapping Programme, as well as using a geographic information database for the conversion of older 'card catalogue' data. The benefits of metal detecting, in enlivening the Portable Antiquities Scheme, was a good source of debate for UK students in particular, whose academic background had come with a mistrust of them. At Thetford Forest, on the other hand, the Japanese students as well engaged in the use of the dumpy level to plan a profile of a prehistoric long barrow; an archaeological skill which gave us the chance to compare this method in practice. For instance, Sabrina had also used dumpy levels whilst excavating in France, as had Mirai and Freddy. The mixture of hail and sunshine was also a good introduction about typical archaeological weather.

● Day 12 — 24th February

We visited an area near to Thetford Forest, but in a landscape that was very much different. The town of Thetford, a major site spanning most historical periods with its impressive artefacts record, was a nice starting point for outlining the archaeology of the area. This was followed by a visit to Grime's Graves, particularly the Greenwell mine that is normally closed to the public. It was an amazing experience, and although it was a confined space for any long discussion, it was interesting to experience these areas as the miners of the Neolithic would have done. On the other hand, our tour around Norwich, led by Brian Ayers, proved to be especially informative on the issues surrounding urban heritage, including the impact of increasing development on conservation within the city. For instance, we saw a corrugated cardboard factory which under the guidance of Norwich City Council did not expand into the medieval Fishergate area, thus maintaining the original infrastructure. Examples like this definitely added optimism for Norwich's future as a city of heritage.

● Day 13 — 25th February

On our final day, we visited the site of Sutton Hoo in Suffolk; the area in which human remains were discovered dating from the 7th century onwards, including the ship burial, supposedly of King Rædwald. This has largely become the epitome of British archaeology, so it was befitting for us to visit this area to summarise the contribution such discoveries have made to heritage globally as well as speculating on the future of heritage management. A tour was led by Martin Carver, formerly the main excavator on the site, so it was unsurprising that he was able to demonstrate a large amount of knowledge of the site's history and the research done on it. However, more discussion was offered about the site's future, namely concerning the excavation of some of the more intensely-ploughed fields nearby, as well as a reconstruction planned based on the excavated remains of the ship. I feel that this was a good example of considering the past and future of archaeological research, which is helped by it being an incredibly well-documented case study.

◎ Reflection ◎

Overall, I would say that what was unique to the programme was the ability to expand the network of people that I can talk to concerning heritage. Consequently, I feel it has also improved my presentation skills and confidence

in my ideas. Being part of a knowledge exchange broadened my horizons, and allowed me to appreciate the amount of opportunities that I have to communicate globally. I would definitely recommend this programme to anyone looking for something different.

●Day 1 — 13th February

We met up with everyone at the British Museum for a quick run through of the galleries. The museum was very crowded – was this because many museums in the UK are free? I wished that we had more time to see the collection as it was absolutely fabulous.

Afterwards, we had a small introductory presentation by Dr Sam Nixon and got a chance to introduce ourselves and get a little better acquainted with everybody.

How does the British Museum present British heritage and archaeology and who is the audience for this?

The audience is clearly the world. The museum presents masterpieces of British archaeology and heritage in a very elegant and simple style and serves as a great resource for students and professionals alike.

●Day 2 — 14th February

The Bus Tour was a lot of fun. We passed by Piccadilly Circus, Buckingham Palace and the Tower of London, and over Tower Bridge. Then we walked over the Millennium Bridge to arrive at Tate Modern. We then had a scour on the 'beach' for some Thames treasure and had lunch in a lovely cafeteria. After a river boat cruise we got to Tate Britain to have a look at British oil paintings to get an idea about the 'imagined' romanticised past depicted in the countryside as well as lakeside paintings from the Romantic period. We had a few minutes to explore the galleries, and the 'Art and Alcohol' exhibition was really fascinating as it showed different ways in which artists depicted the use and abuse of alcohol by the public.

What types of heritage sites are among the highlight attractions for tourists in London?

A mix of modern buildings, industrial era buildings, a lot of neo-classical and neo-gothic, lots of churches, royal and governmental buildings and art galleries

How are the sites presented to tourists?

Very discreetly actually. Not very obvious apart from the use of plaques on the wall. The signposting with maps is very effective in my opinion. The current state of the London Stone appears a little sad as it seems forgotten by a road...

●Day 3 — 15th February

Exciting day! After looking around the area of Bloomsbury and Russell Square, we met Prof Nicole Rousmaniere at the British Museum and she took us behind the scenes of the East Asia Department. It took some time until we received our visitor badges, but soon we were allowed to walk through the 'bowels' of the British Museum. We were shown a few outstanding artworks, including one of the shunga scrolls of which parts had been displayed in the 2013 Shunga exhibition. We were also allowed to hold an earthenware pot from the Jōmon Period, which I thought was very moving.

After lunch at the staff cafeteria, Dr Neil Wilkin from the Prehistory Department showed us a fantastic torc that had just gotten in and hadn't gone to the news yet! Hence no pictures from our visit to the Archaeology department, as we were not allowed to take photos of the torc. Dr Wilkin also explained about the Portable Antiquities Scheme, which I must say am not too much a fan of, but it was very interesting to hear how other countries handle chance finds!

We then headed off to the Museum of London, which took a completely different approach to presenting objects and teaching about history. It looks as if it was geared more towards families and making museums 'fun', whereas the British Museum has a very classic collection which, however, does itself lend to research very well. I would say that both ways, the British Museum and the Museum of London, have their positives and negatives.

What different roles do the British Museum and the Museum of London have in the presentation of British Heritage?

British Museum has more of a professional, collection-type atmosphere, good for the passing on of preserved knowledge, while the Museum of London is more interactive, and more geared towards families, with a more 'local' scope.

How does their presentation of material differ?

- British Museum: Classic display-style with small plaques about the objects. Sober, adult. This gives it a sense of 'grandeur' of times past.
- MoL: Modern building, fresh displays geared towards families with not much historical background.

● Day 4 — 16th February

So happy about finally getting to see Stonehenge! The visitor center did, in my opinion, a good job. The displays were neat, and the explanations by our volunteer guide, David, was easy to follow, and the media were well embedded. I actually thought of Stonehenge as more of 'Bronze Age', but I learned that most of it was actually built and used in the Neolithic period.

Avebury, which we visited in the afternoon, had a completely different atmosphere, which was very interesting. It is really fascinating to see the huge boulders they somehow managed to get into place in order to have a complete, massive stone circle. Sadly the visitor center was closed, I would have loved to go!

After a visit to Silbury Hill and checking in at the lovely Bear Hotel in Devizes, we were treated to an 'after-hours' visit to the Wiltshire Museum, which was equally fantastic! David Dawson, the director, gave us a very charismatic tour and made me realize how difficult it is for small museums to survive, and how important social media and public support are for them. That said, their collection was exquisite, and I will surely mention it as a tip if friends of mine ever visit the south of England!

How do Stonehenge and Avebury differ as visitor attractions and in what ways are they presented differently to the public?

Stonehenge is definitely more well-known and also marketed way more professionally. This may lie in a different approach too as Stonehenge can be fenced off, whereas Avebury with its village in the middle simply cannot have a ticket gate. So we might say that Stonehenge is a top production, and Avebury is a less flashy, laid-back cousin in the countryside.

● Day 5 — 17th February

Today we visited the famous Roman Baths in Bath. The site itself was fascinating, and we were impressed by its fantastic state of preservation. I got a sort of 'Disneyland vibe' from the site though, as it seemed a little too artificially perfect for my taste. Nonetheless, the museum was interesting to see, and I found myself well immersed in this very local piece of history, although I found some explanations from the audio guide a little too long for my taste. There was also a very good Roman reenactor, who added to the 'Disneyland' experience as he stayed in his role throughout the conversation we had with him! There were plenty of possibilities to immerse yourself in the world of the Roman Baths, including a drink from the source which was an experience in itself.

I really loved the afternoon walking tour in the rain! Our guide managed to capture my interest as she was pointing out small things and teaching us fun facts about the city and its inhabitants. The tour really opened my eyes to how interesting a simple city walk can be, and I am surely looking at street signs and information plaques in a different way now!

Why is Bath such a popular tourist attraction for international tourists?

Bath is a very special place, having the best preserved Roman baths north of the Alps! The amazing structure gives off a very nice 'Roman feel', which is of course well marketed as a tourist magnet. It also lies in a beautiful Georgian town, which adds to this romantic atmosphere.

How important is 'heritage' in bringing people to Bath?

The Roman Baths may not have so much to do with British heritage after all, considering that they are just a very locally focused attraction about the Romans in the UK, and not, let's say, 'real' British... The Georgian architecture might, however, bring heritage fans to Bath.

● Day 6 — 18th February

Full day in London today. First we went down to Westminster Abbey. I would have liked a proper tour of it, but as we were to stay respectfully silent, the tour was done with audio guides. I missed the opportunity to ask questions this way, but it was a good tour nonetheless. The Abbey itself was fabulous, and I was astonished to see how many famous people were buried there. I might never find out why exactly Charles Darwin and Isaac Newton ended up there...

The Churchill War Rooms struck me as a little strange place. While it was interesting to see how they lived and worked down there, I was not able to get a big picture as everything was so sterile and clean-looking that it did not look like a war-time memorial at all.

As for Dennis Severs' House, I would have very much appreciated a little introduction before going in. I imagined it as a sort of museum, but in the end I thought it was really creepy and just did not get the point of it really, to be honest!

The Museum of London Archaeology (MOLA) excavation after that prove to be a good distraction. We received an informative talk about the site and it was great to see how an archaeological excavation site behind construction screens looks like. It was nice to confirm that rescue excavations in the UK seem to work similarly to those in Switzerland. I would however have never thought that an art gallery would house a Roman amphitheatre.

What different heritage audiences did the places we visited today relate to and what different elements of British heritage story do they tell?

Abbey: General audience interested in architecture and heritage, as it is one of the main monuments of London. It tells of the power of the church and the grandeur it attained in the Middle Ages.

Churchill War Rooms: Maybe more for seniors and school classes with WWII on the curriculum. Since it is only very 'limited' in the scope of the story it tells, I felt it was more of a curiosity.

Dennis Severs' House: Creepy! Definitely for those who are specially interested in the 1700s or who are 'romantically inclined' and like wacky experiences. Without proper knowledge it does not really make any sense in my opinion.

● Day 7 — 19th February

We moved up to Norwich today. I was really excited about going to Must Farm. Although I had never heard about the site before, seemingly it is a very hot place in terms of archaeology at the moment.

Must Farm was brilliant! It is always a privilege to be allowed access to an ongoing excavation and see behind the scenes. I am really glad that we got to see it. Actually the environment archaeologists are working on reminds me a lot of wetland archaeology back home. It might not be such an uncommon sight in Zurich to find a Bronze Age wheel, but it being in Britain, it was heartwarming to see how excited everyone was at this wonderful find. And we even got to see it on the day after the first press release.

After our arrival in Norwich we met Dr Simon Kaner at the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, who held a speech for us and told us much about the history of the Institute and the work of the Sainsbury family who made everything possible. It is always great to hear that such a place exists and that research can go on thanks to someone's vision and engagement.

Then we had to do our group speech we had prepared about our experiences during the week; Kohei, Natsuko and I did well and we won! The fudge we received as a prize was really tasty.

How do the excavations at Must Farm compare to those in London?

A different setting. MOLA was rather about commercial exploitation of the area, so they have to be in and out quickly. Nothing of real national interest for the moment. Must Farm, on the other hand, is becoming the UK's hottest site with all the fabulous things archaeologists are finding, so they get more leeway and time to do things properly.

What are the different contexts and frameworks for the investigation?

MOLA: Typical rescue excavations with quick documentation before building starts.

Must Farm: Long-time excavation due to their sensational finds, more funding, public interest and publicity.

How are these similar or different to rescue excavations in Japan?

I cannot say much for Japan. But in Switzerland there is no 'leisure' excavation at all because funding is very scarce. Basically it is mostly: 'You get three weeks, then we will bulldoze all over the site as long as no fantastic find comes up'. So I would say most excavations in Switzerland are close to the MOLA ones, and far from being spectacular.

● Day 8 — 20th February

This morning we slept till late. First we had a walk around the University of East Anglia (UEA) campus to see its buildings (lots of concrete), and then we went to the Sainsbury Centre for Visual Arts (SCVA) to see its collection. SCVA is really an amazing art gallery, and I loved the way the objects were arranged there – basically you could walk through the gallery and let yourself be swept here and there looking at objects. The Sainsbury's had a real good taste in art, I might say.

In the afternoon we received a nice walking tour of Norwich by Mike Loveday, who showed us around and told us about his work with the Norwich HEART. He was really amazing and seemed to have great ideas about how to 'sell' heritage to the public and make it interesting. I am sure he would be an asset to any taskforce trying to promote a site of interest. He actually made me interested in the field of public advertising and on how important it is to get the 'branding' of a place right.

What are some of the most noticeable features of Norwich from a heritage perspective?

Remarkably well preserved churches, medieval streets and buildings. Everything is in walking distance, so it is very appealing, and maybe easy to promote as a sort of 'heritage feeling package'.

How does the physical structure of the town and its heritage differ from similar size cities in Japan?

As many cities in Japan have been bombed during WWII, it can be difficult to have 'complete' medieval cities. Also, many of the old buildings had been knocked down to make room during modernization periods. Efforts are being made, however, a good example of which is the presentation of reconstructed Edo towns in some of the museums in Tokyo.

● Day 9 — 21st February

Today was a very intensive day out in the countryside.

We first drove up to Happisburgh to meet Dr Hutcheson, who told us about the pre-Acheulean footprints that had been found on the beach thanks to erosion, and how he is planning on promoting the site in relation to the 'Deep History Coast' project. Since they are still at the very beginning of the project, it will take a lot of time though, I think. It was a little sad to listen to his talk, thinking of how much effort and money will be needed to make such an important history known to the public.

On the way up, we visited West Runton (where Mammoth finds had been found) and Warham Camp hillfort – they were both interesting but there does not seem to be funding for interpretation at the moment.

In the afternoon we saw Hunstanton Beach and Brancaster Roman fort (again, a little sad, as it is just a field with a small plaque in front). After a visit to the Queen's estate in Sandringham, we finished the day in King's Lynn, where heritage is more prominent as it used to have a rich seafaring history. The Hansa warehouse was exceptionally interesting with its intricate brickwork. This day really made me think about how much money and effort need to go into a site before tourists will start turning up...

How is Heritage found within the rural landscape presented?

Basically no signage, not very well presented or signposted. No signs on the streets, for example. So basically of no interest to the public unless you know and care about it.

How could this be better presented and integrated?

Connect sites, raise people's awareness through social media, local/national papers and public activities, and get transportation going! Also collaborations with well-established museums to make people aware of your region.

How is the rural heritage of Japan presented and what differences are there with what we see in East Anglia?

As far as I know, rural landscape has nearly no signposting. For example, getting to a not so well-known temple site is really difficult, and even important sites such as Nintoku Kofun are not signposted, so unless you prepare yourself beforehand, it is really difficult to find.

● Day 10 — 22nd February

Today we got to sleep in again, yay! We walked up to Norwich Castle Museum, where we were given a tour by Paris Agar, who works on the Castle Keep project. I found it very fascinating that they were planning on restoring the original set of floors to give it a more 'castle-y' feel! I tend not to think too much about the layout of rooms in castles, but I thought their idea was very good. The rest of the museum was a little too wild for my taste though. There was too much randomness around to really appreciate it, as I thought it was difficult to connect between mummies, taxidermy animals, medieval armours and custard cups. In my opinion, a more Norman-centered approach would benefit the wonderful setting.

In the afternoon we went to Caistor Roman Town. I was actually surprised to find 'only' a field there! That is why they use an app of Augmented Reality (AR)! It was great to see an ancient town come to life on my phone screen, and I think this would be a good way of promotion for not-so-showy sites. Maybe something for the rural areas to think about?

After the visit, we got a talk about the local archaeology community which again made me wonder about how much effort and money goes into maintaining heritage and archaeology sites.

What are the positive ways that archaeological sites are being linked to in local communities and the wider public?

Locals act as volunteers and do active work just by, for example, walking their dogs on the site and checking that everything is ok. This gives a sense of community and belonging. Open Days encourage the public, and it is important that people are positive and welcoming towards the history of their hometown.

How can we improve the interpretation of archaeological sites for the public and their integration into local communities?

Easy access with simple explanations and clear pictures. The AR-App is a great idea to have for otherwise not so impressive sites. Also, community work and connection to social media is important, as are connections to newspapers to reach people of all ages.

● Day 11 — 23rd February

A very full day! We paid a visit to the Norfolk Historic Environment Service at the lovely workhouse at Gressenhall. Heather Hamilton told us about the Mapping Survey and the Database, which made me wonder if we had something similar back home. I think it is a fabulous resource for professionals and amateurs alike. Afterwards, we were told about the Portable Antiquities Scheme and what metal detectorists report, but my criticism of it did not go down very well unfortunately as it was blocked totally. This was a little sad, as I would have loved to discuss about it more!

We spent the afternoon in Thetford Forest. I was surprised to hear that the region had been used for rabbit farming – this would never have occurred to me! The visit to the warren bank with flints in it was very interesting, and I wonder why there was only one bank with flints built into it. A real mystery.

Afterwards we did a mapping of a Bronze Age burial mound in the forest and were instructed on how to do a dumpy level survey. It was a good refresher course as I had not done it for two years. It does make me somehow proud to know that we did help a tiny little bit with this project. Maybe I should start looking into volunteer work after all...

What are the various ways in which the Historic Environment Service manage the Norfolk heritage environment?

Mapping National Program, offering of advice before building/construction, management of historical sites, monument management and community engagement, also participation in the Heritage Lottery Fund.

Is there an equivalent system in Japan and if so how does it operate?

I do not know about Japan, but as far as I know there is no equivalent in Switzerland...

● Day 12 — 24th February

Today was very exciting. We visited the Thetford Ancient House Museum and saw its special exhibition on flint titled 'Flint Rocks!'. The exhibition included Japanese obsidian tools loaned from Japan and showed that flint was used in firearms until the last century, a fact which I had never thought about.

After that, we were allowed to go down a mineshaft at Grime's Graves. We were all given a hard hat to access the mine, which was not only out of season but also closed to the public. It was a 15m climb down a steep ladder in the dark, but we all did it! The shaft itself was divided in branches of different heights and widths: we had to duck and crawl into some of the branches. I was astonished to see flint layers there in such nice nodules and bands inside the chalk, as if they were strategically embedded by someone.

In the afternoon we were given a heritage tour of Norwich by Brian Ayers, who had been excavating in Norwich for more than 30 years. He took us to many interesting places including the Cow Tower, which was unfortunately locked. It was interesting to see the city from such a different perspective. Finally, we were taken to a student reception at the UEA campus. Simon Kaner delivered a speech and we talked to various people before going out

for yummy Indian food.

How can the material heritage of our past best be integrated into a developing urban landscape?

Through careful planning, integration of the public, gentle remodernization and putting more value on our roots. If the public believes it is important to cultivate heritage, it is more likely that politics will follow.

What ideas do you have for new approaches to preserving and integrating heritage in towns and cities?

Preserving the outside façade of houses and remodelling the inside is a good way to keep the 'charm' of an old house intact, but for a proper integration people need to be aware of the importance of heritage objects. Augmented Reality can be a useful tool as it can make the public aware of the importance of heritage effectively and put value in teaching about the past at school.

● Day 13 — 25th February

Another exciting (and the final) day today! We went to see Sutton Hoo. Sutton Hoo had been the topic of my first essay I had to write in school more than 10 years ago, and as such it has a special place in my heart and I was really looking forward to the visit. Prof Martin Carver, who had excavated part of the site in the 80s and 90s, took us up to the burial mounds and explained to us about the original excavation in 1939 and how Suffolk had been in Anglo-Saxon times. After this, we went out to the exhibition to see replicas of many pieces found in the burials. The cloisonné and metalwork really was amazing! It is a little sad that the British Museum insists on keeping the originals, when Sutton Hoo should have them, in my opinion. It might be something to deny other countries the originals back, but I think inside the country, the place of origin should get the rights to show them.

After returning to Norwich, as a grand finale for our Winter Programme we were all treated to a really funny (but still scary) Ghost Tour in the evening.

What is the value of a comparative approach to British archaeology and heritage that places it within the context of approaches to heritage and archaeology from other parts of the world?

I was surprised how far heritage is engrained in the fabric of British people's everyday lives. People do care, and are interested in it, a thing which I have rarely seen elsewhere. It might be interesting to see if one can get to the roots of this phenomenon and maybe distill a sort of 'How-To' to apply this in less heritage-centered countries that deal with the past far more pragmatically.

●Day 1 — 13th February

On our first day we met up with all the other participants and staff members at the British Museum where we had a short tour of some parts of the museum. Charlotte Battersby also gave us a short introduction to the Rosetta Stone in the Egyptian gallery. After this Sam Nixon gave us a brief introduction to the history of the British Museum.

●Day 2 — 14th February

On our second day we first had a bus tour through London to get a general overview of the city and its history. We also saw a reconstruction of Shakespeare's Globe Theater near the Thames. Trying to get some experience of local archaeology we searched in the Thames river bed for pottery, bones and coins. After lunch we headed for a Thames River cruise, where we saw important historic buildings near the river. We also visited the Tate Britain, which has a magnificent collection of British artworks. On this day we got an overall sense of London's historic buildings, architecture and Britain's most important artworks.

●Day 3 — 15th February

The tour we had at the beginning of our third day was about the local area around our hotel, called Bloomsbury. We had an overview of the buildings and parks of Bloomsbury and also learned about heritage signs used in the area. It was the first time that I heard about the Bloomsbury Group. We also made a short visit to University College London to see a memorial for Japanese pioneers who studied in the university between 1863 and 1865. Then we went to the British Museum again to see some of the materials behind the scenes of this big and fabulous museum. We first met Prof Nicole Rousmaniere in the Japanese Section. Then we went to see a newly developed department that produces 3D prints of artefacts for the museum. After lunch we met Dr Neil Wilkin of the Britain, Europe and Prehistory Department, who works on Bronze Age objects. At the end of the day we had a tour of the Museum of London, where we saw objects illustrating the history of the City of London. In summary we saw the Bloomsbury area around our hotel and had a rare opportunity to see behind the scenes of the British Museum. In contrast to the big and international British Museum we also saw the Museum of London which focuses on the history of the city itself and has more interactive exhibits for children. The Museum of London is more a museum for children, while the British Museum is designed more for highly educated students and adults.

●Day 4 — 16th February

On the fourth day we saw the legendary Stonehenge and also had a tour through the visitor centre of the site. After we visited Stonehenge we went to Avebury and saw the henge there. Before returning to the hotel we also visited Silbury Hill, the biggest man-made hill I have ever seen in Europe. After a small break we went to the Wiltshire Museum, a small museum focusing on the history of the local area. The Wiltshire Museum owns a lot of artefacts, some of which are displayed at the Stonehenge Visitor Centre. We had a nice tour around the museum after its regular opening hours. On this day we were able to see how archaeological sites, like Stonehenge, Avebury and Silbury Hill are presented to the public. Everyone can see these sites from a distance but to get a closer look at Stonehenge one needs to pay entrance fees. Avebury is part of a village so one can just go there and visit it. Anyone can get as close as he/she wants to the stones, unlike Stonehenge which has a fence around the site. Silbury Hill is not good for tourists because it is a little dangerous to get to the site, and there is not much interpretation offered. However, the site is still very impressive. The Wiltshire Museum is not a very famous museum and as such can be contrasted with the Museum of London. Because of this, however, the Wiltshire Museum tries to actively use social media. Even though the Wiltshire Museum is smaller than the Museum of London, it has a lot of interesting and precious objects in its collection.

● **Day 5** — 17th February

On Wednesday we went to the Roman Baths in Bath. They have a nice museum inside and we also got the chance to take an audio guide with us and try out the mineral water from the Roman Baths. In the afternoon we had a tour through Bath in the rain. We were provided with lots of background information on the buildings in Bath. There we could see the importance of Bath during the Roman period and also in the Georgian period. During the tour we saw for example the Royal Crescent of the Georgian period. The Roman Baths are really prominent in the city, but inside the site are many things not deriving from the Roman time when it was originally built. It was still very impressive to see the size of the Roman Baths and their importance for the city itself.

● **Day 6** — 18th February

On the sixth day when we were back in London and visited the famous Westminster Abbey, where a lot of important people are buried or have a memorial, such as Charles Dickens, Charles Darwin and Shakespeare. After Westminster Abbey we went to the Churchill War Rooms and explored it by ourselves. We saw the rooms there and got a lot of background information about the Second World War in Great Britain. After lunch we visited Dennis Severs' House. There we saw the whole house divided into different times on the different floors. None of the room had electricity. It felt as if the families who lived there between 1724 until 1914 were just out for a walk and could come back at any time. Everything in this house seemed to come directly from the period and it took us for a tour back in time. We also had the privilege to see an excavation in the heart of London, where they had found some Roman remains. We also got to see a bad example for displaying archaeology in London. It was a Roman wall that you could only see when you go into a hairdresser's shop. There was a sign explaining it, but there were objects lying in front of that sign. There was also a hairdryer in front of the window, so it was hard to see the wall, and there was no sign on the outside saying the remains are there. After we visited the hairdresser's we went to an art gallery which exhibited paintings mostly but also presented some archaeological features in the basement. The original walls of a Roman amphitheatre were integrated into the building and the missing parts were reconstructed with light. To sum up, today we saw some important buildings in London's history like Westminster Abbey and the Churchill War Rooms and also learned how information about the past of London is retrieved. We also saw how archaeology is presented in London as in the hairdresser's and in the art gallery.

● **Day 7** — 19th February

Early in the morning we visited the archaeological site called 'Must Farm', which is sometimes also called 'Britain's Pompeii'. We had a tour around the site and received lots of background information about the materials discovered so far. On the previous day archaeologists had found a wheel which we were allowed to see very closely during our visit. We also saw some fine pottery which archaeologists had found and saw pictures of some textiles from the excavation which are really rare to find in Great Britain. Thereafter we visited the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures in Norwich for the first time. Sam Nixon gave us a tour around the building and Simon Kaner then gave a nice orientation talk about the history of the Institute and also his work. After he finished we gave small presentations we had prepared the previous week about one of the set questions.

● **Day 8** — 20th February

On Saturday we visited the campus of the University of East Anglia (UEA), where we had a tour led by Sam Nixon and Akira Matsuda; we were also provided with student-related information from Frances Iddon. In the university I saw a building with thatch on the top and the walls, the so-called 'Enterprise Centre' of UEA. It was the first time I saw a building like this. We then visited the Sainsbury Centre for Visual Arts (SCVA) which

was inside the campus area. There we could see an exhibition with a variety of objects from all over the world, collected by Lord and Lady Sainsbury. Lord and Lady Sainsbury were also in charge of constructing the building of SCVA with its unusual architecture. In the afternoon we had a small visit to Norwich Cathedral and attended a presentation by Michael Loveday about the Norwich 12. Norwich 12 are the twelve buildings in Norwich that have a special historic background and are unique in their own ways. He also gave us an interesting tour around Norwich, where we saw several of the Norwich 12 mentioned in his presentation. Today we learned that heritage is not always about very old buildings, such as medieval churches, but can also be combined with newer ones like 'the Forum', a building that has a big library inside and was built around 2000. We also learned that it is easier to advertise a group of buildings instead of individual buildings, and that the building advertised as a group benefit from the brand they are part of.

● Day 9 — 21st February

In the ninth day of the programme we first visited the Deep History Coast with Dr Andrew Hutcheson at Happisburgh. Before we had lunch we also visited West Runton, where remains of a mammoth had been found and also the Warham Iron Age hill fort. In the evening we drove along the Hunstanton beach and visited the Brancaster Roman Fort and the Sandringham Estate, an area where the Queen of England has a house to stay occasionally. The area is managed by the Queen's staff. Before we had dinner we also had a nice tour around Kings Lynn, a city that once had strong trading connections with the mainland Europe. In summary, we saw most of the important sites along the North coastline of East Anglia and learned about different approaches to heritage management. In Happisburgh, for example, they want to improve the site and attract tourists by taking some new initiatives, such as apps, in order to make the site of the earliest footprints in Europe visible for visitors. West Runton was excavated earlier but there has not been an attempt to improve the site for visitors yet.

● Day 10 — 22nd February

On the tenth day we first visited the Norwich Castle Museum. We had a tour around the castle and got an introduction to the Castle Keep project with Paris Agar and Angela Riley. The Castle Keep project is an endeavour to improve the castle by restoring some parts of the original building for visitors. Right now the castle does not really have an authentic feel because there are all kinds of different exhibits in the building, including paintings, taxidermy and ancient Egyptian materials. Also the original interior design is different to the present because of the usage of this building as a prison in the past. We also got to see the Caistor Roman Town site and tried out an app which a local archaeology trust had developed in order to improve the presentation of the site. We also had a tour around the site with Dr Will Bowden, Caroline Davison and Andrew Ray. After our visit of the site we had an interesting presentation on community archaeology and the differences between Japanese and British archaeology. On this day we saw a museum that was quite old fashioned, because it had many very different exhibitions and did not really focus on anything. We also learned about an interesting approach to making things visible at a heritage site for tourists. I think this approach could be used for other sites as well.

● Day 11 — 23rd February

Since I was ill I was not able to join the programme this day.

● Day 12 — 24th February

On the twelfth day of the programme we first visited a small museum in Thetford called 'Ancient House Museum', which has a nice collection of flint stones and gave us a nice overview of the history of Thetford. The museum also had a special exhibition where Japanese obsidian tools were compared with British flint stonetools. After a few minutes of bus drive we arrived at the Grime's Graves flint mines. Visiting this site was a great

opportunity because it is closed in this season and despite that we were able to see a big mine shaft usually closed to public visitors. We explored the tunnels by ourselves. In the afternoon we had a tour about Norwich heritage and economic development with Brian Ayers for about two hours. He showed us historic places in Norwich that were well preserved and also other places where archaeological evidence of the past had not been preserved. He told us how he thinks heritage presentation could be improved. Later in the afternoon we joined in a reception for students in the Council Chamber of UEA, in which our group was presented to the university. To sum up, we had a great experience of seeing a flint mine that is usually not available to the public and learned about the importance of flint in the region. We also had an opportunity to thank SISJAC and the people involved in the Winter Programme for their hard work and for the wonderful programme.

● **Day 13** — 25th February

On our last day of the programme we went to the famous archaeological site Sutton Hoo. We took part in a tour guided by one of the excavators involved in the second phase of the excavation, called Professor Martin Carver. He has published a famous book on the site of Sutton Hoo and gave us a lot of background information about the excavation, including the episode of his playing golf from one of the mounds. The exhibition of the finds from Sutton Hoo was small but gave a good quick overview of the site.

● 1日目 — 2月13日

初日は大英博物館にて集合した後、館内の主要な展示を Sam Nixon 先生に解説していただきつつ巡りました。Sam 先生のお話の中では、好事家の寄付により発展した草創期の博物館や、エジプトの巨大な彫像移送する方法など、展示のみならず博物館全体の在り方やその展示方法などについても言及されている点が興味深いと感じました。博物館におけるイギリスの遺産の展示方法としては、他の地域との結びつきが強く意識されているように思います。展示場の間を区切る扉は大きく開かれ、入館者はイギリス関連の展示場から、隣接する他の展示場へ簡単に移動することができます。こうした様式により、大英博物館が示そうとするイギリス史は、それ自身が世界史の大枠の中での一部であり、他の地域史との関係が重視されたものであるとの印象を受けました。

● 2日目 — 2月14日

午前中はロンドン市街の景観をバスから眺め、その後は付近を散策したほかテムズ川の観光船から再びその風景を楽しみ、最後に Tate Britain にて美術作品を鑑賞しました。テムズ川沿岸では、ロンドン塔のような歴史遺産と呼ぶべき古い建物とロンドン・アイのような近未来的な建築物とを同時に眺めることができ、少し不思議な印象を受けました。その一方で、街角にあるレストランの建物が古い建築物を再利用したものであるなど、細部にも古いものと新しいものとの折衷が見られました。

● 3日目 — 2月15日

三日目はロンドン大学の構内を見学した後、大英博物館とロンドン博物館を訪問しました。大英博物館では一日目と違い博物館の職員の方々からそれぞれの研究対象について解説していただきました。また、イギリスの考古学研究に関しては出土品を実際に手で触れつつその概要について説明していただいた他、それらの遺産を 3D プリンターで複製する技術など博物館の新たな試みを紹介していただきました。その後見学したロンドン博物館では現代までのロンドン及びイギリスの歴史が様々な形で紹介されていました。大英博物館と比べ、この博物館では展示品により多くの図解が加えられていて、予備知識が無くてもイギリス史を理解することができるような工夫がなされています。また館内には木造住宅を再現した実寸大の模型など、体験的な歴史の学びを促す取り組みが見られました。

● 4日目 — 2月16日

ロンドンからバスでソールズベリーに赴き、ストーンヘンジや Avebury の遺跡群、そして Wiltshire Museum を見学しました。ストーンヘンジとその関連施設を訪問して、これらの遺跡がシステマチックな方法で観光客に紹介されているように感じました。併設された案内センターの中には大画面を用いたシミュレーションや遺跡の模型など、遺跡の概要や当時の人々の生活などを分かりやすく伝えるための様々な工夫が加えられています。そして住居の再現模型にて更なる説明を受けた後、入場者は専用バスに乗って実際の遺跡に向かいます。この一連の流れは多くの観光客が遺跡について効率的に学ぶことができるよう考えられたもので、巧みな遺産展示の一例と言えます。一方、Avebury では上記の解説等を極力減らし、入場者は事前に説明をあまり受けないうまま実際の巨石を眼にし触れることになります。そこから得られる理解はストーンヘンジのそれとは質的に異なりますが、遺跡が持つ神秘的な雰囲気を感じ取る意味で有意義な工夫ではないかと感じました。

● 5日目 — 2月17日

5日目は Bath にてローマ時代の浴場遺跡等を見学しました。この遺跡において特徴的に思えたのは、敷地の中で当時のままに保存された部分と博物館として改装した部分とが巧みに織り交ぜられ、展示されている点です。遺跡には大浴場跡を中心にローマ時代の建物が多く残されていて、ローマ時代の生活様式を理解する上で大きな意味を持っています。一方で、遺跡には内側からくり抜くようにして新しい博物館の建物が設けられ、遺構から出土した物品を展示する場となっています。こうした工夫は、ローマ時代の歴史を体験的に学びつつ適切な解説を得ることができる点で、観光客にとって分かりやすいように感じました。

●6日目 — 2月18日

午前中に Westminster Abbey と Churchill War Room を訪れた後、午後には Dennis Severs' House を見学し、またロンドン市内にある考古学の発掘現場を訪れました。Dennis Severs' House に関しては、その展示様式が Avebury でのそれと類似しているように感じられました。館内には18世紀におけるロンドン市民の生活を示す物品が多く展示されているものの、それらにはほとんど説明が加えられていません。こうした手法もまた、当時の市民生活を感覚的に学ぶよう促しているように思います。

●7日目 — 2月19日

ロンドンから Must Farm に移動して発掘現場を見学し、その後ノリッジのセインズベリー研究所 (SISJAC) にて Simon Kaner 博士に拠る SISJAC の概要と成立に関する講義を受けました。Must Farm で紹介していただいた出土品には、木材や繊維片など石器や鉄器より比較的残りにくい物品も含まれていました。元々この遺跡は、青銅器時代の住居が川に埋もれ現代になって発掘されたもののようで、こういった環境により保たれた特殊な出土品の数々もまた、この遺跡が近年大きな注目を集めている一因なのではと感じました。

●8日目 — 2月20日

午前中に University of East Anglia のキャンパスと Sainsbury Centre for Visual Arts を見学し、午後には SISJAC にて Michael Loveday 博士にノリッジにおける歴史遺産について講義していただきました。博士による講義の中で、ノリッジ市が市内の歴史遺産を個々に紹介せず、それらを体系的に結び付け伝えているという内容が印象的でした。十二日目に Brian Ayers 氏が言及されていたように、ノリッジ市には中世以来の建物が多く残されているものの、その人気はイギリス国内において高いものとは言えません。そうした中、上記の工夫により市の全体像を分かりやすく示す試みは、他の多くの都市にも応用できるように思えました。実際の街並みも、前述の中世以来の建物が立ち並ぶ一方、中心地には近代的な図書館が建てられるなどし、魅力的なものでした。

●9日目 — 2月21日

9日目はまず Happisburgh にて旧石器時代の足跡が発見された場所を訪れた後、鉄器時代の要塞跡である hill fort やローマ時代の遺跡などを見学し、最後に King's Lynn の市街を散策しました。Happisburgh や hill fort の遺跡群では Avebury のように説明書きを減らした状態で保全がされているものの、この場合そうした取り組みは観光客にとって少し不親切に映るのではと感じました。特に Happisburgh の遺跡に関しては、私達は Sam 先生と Andrew Hutcheson さんに説明していただいたためそこがイギリス史において重要な場所であると理解できたものの、何の予備知識もない人が偶然訪れたとすればそこが歴史遺産であることに気づかない場合もあるかもしれません。

●10日目 — 2月22日

午前中にノリッジ城を訪れ、城内にある意向と博物館とを見学した後、Caistor Roman Town にてローマ時代の遺跡について Will Bowden 博士らから説明していただきました。ノリッジ城では城跡を利用した展示が行われる一方で、Bath での浴場跡のように一部が整備され、他の博物館や美術館が併設されています。これらの収蔵品の中には白熊の標本など地域と何の関係もないものも多く、Wiltshire Museum のようにこれまでに見てきた地域の博物館とは大きく異なるように感じられました。しかし、歴史遺産と公との関わりと言う点について考えるならば、歴史に限らず自然や美術についても紹介する場として博物館を機能させるこうした取り組みはとても興味深いもののように思えました。

●11日目 — 2月23日

11日目はまず Historic Environment Service (HES) の事務所を訪れ、David Gurney 氏らから HES の概要と National Mapping Programme など HES が主体になって行われている取り組みについて説明していただきました。その後 Thetford の森を訪れました。HES が作業の対象としている領域は Portable Antiquity Scheme から学校教育

との連携に至るまで非常に広範囲にわたります。日本の場合こうした取り組みは国と地方公共団体、そして様々な部局に細分化されているのではないかと思います。HESのこうした性質は歴史遺産の保全や紹介を一つの機関が行える点で有利と言える一方、HESにかかる負担が大きくなり作業を非効率的なものにする恐れもあると思います。歴史遺産にかかわる行政組織の性質と、その仕事の在り方を見る上で、イギリスのHESと日本との比較は興味深く感じられました。

●12日目 — 2月24日

午前中に Grime's Graves の発掘現場を訪問し、午後には Brian Ayers 氏に解説をしていただきつつノリッジの街並みを散策しました。Grime's Graves は新石器時代における flint 石の採掘現場で、実際に当時の行動に入り中を見学することができました。また Ayers 氏によるお話では都市開発と遺跡保存との摩擦について実例を上げつつしばしば言及されていて、日本と同様、ノリッジにおいてもこの問題が重要なものであることを実感しました。

●13日目 — 2月25日

最終日の十三日目は Sutton Hoo の遺跡を見学しました。遺跡に併設されている博物館ではロンドン博物館と同様、発掘された仮面の模型を被るアクティビティや、当時の家屋を再現したものなど、小さな子供にも親しみやすい工夫が為されていて印象的でした。4日目に訪れた Wiltshire Museum でも子供に配慮した展示工夫を見ることができ、地域史を伝えることを目的とした博物館においてこうした取り組みが共通したものであるように感じました。

◎ 結 び ◎

およそ二週間の間、今回の冬季プログラムに参加させていただきましたが、実施期間を通じて多くの歴史遺産を訪れ、そこで遺産の管理・研究に従事する方からその概要について解説していただけるなど、イギリスの考古学と歴史を学ぶ上で非常に充実した内容だったように思います。またイギリス滞在中、同じく参加したヨーロッパの学生や先生方と交流する機会を持てたことも、自身にとって非常に有意義な経験でした。このような貴重な機会を与えていただいた東京大学とセインズベリー研究所の先生方、スタッフの方々に心から御礼申し上げます。

● 1日目 — 2月13日

初日は大英博物館からスタートでした。壮大な博物館のほんの少しの空間しか目にはしていませんが、大英博物館という世界で（おそらく）初めての博物館の歴史と重みを感じた一日でした。エジプト・ギリシャからの収集品をめぐり、歴史的文物の所有権について考えさせられました。また、ミイラという特殊な人体を含む遺物の展示についても、考えを深めることができましたと思います。イギリスの歴史については、メソポタミアの農耕起源から鉄器時代、ローマ、アングロサクソンと経年的に展示が展開され、大きな流れを感じるような展示になっていたと思います。サットンフーのオリジナルの遺物もこの博物館に展示されており、最終日のサットンフーの訪問によってその問題点を再認識することができました。遺物がどこに所属・保存されるべきかという問題は数多くありますが、サットンフーの出土品を自分の目で見ることは非常によい経験でした。

● 2日目 — 2月14日

ロンドンという街の全体的な地形や建物、街にみる歴史の断片を探す一日でした。バスツアーではパディントン近辺からバッキンガム宮殿、シティとロンドン塔までを概観し、街並みの特徴をつかみ取ることができました。ロンドン塔からは徒歩でテムズ川沿いに散策し、モニュメントやセントポール寺院など、特徴ある建物にふれながらロンドンの街づくりについて考えることができました。ロンドンの大火や戦後の街の再建など、ロンドンを特徴づける街並みのあり方を理解できたと思います。また、戦時中の爆撃により破壊され新しく建設された建物、破壊されなかった建物が調和している点に、ロンドンという街並みの特徴があると感じました。

テート・ブリテンでは、ターナーの絵画を中心としてイギリスのランドスケープについて考えました。絵画にみる牧歌的な風景と、それを描いた作者の心情や目的などについて考え、ふだんとは違った視点で見ることができました。この美術館はテート・モダンとは違い、モダンアート（どこまでをモダンアートとするのかは難しいところですが）を含まない歴史的な作品を多く所蔵する施設です。テート・モダンとは違いどこか安心するような雰囲気がある美術館であったと思います。

● 3日目 — 2月15日

午前中はホテル近辺の Russell Square からロンドン大学周辺を歩きました。Square という概念は日本にはあまりありませんが、ロンドンの街づくりを考えると、緑を残しつつ square の四辺の建物の雰囲気統一している点に納得しました。ロンドン大学ではベンサムの体を見せてもらったほかロンドン大学の校風について知ることができました。

午後は再び大英博物館に向かい、Japanese Section と Department of Britain, Europe and Prehistory に赴いて職員の方々の話を聞く機会を得ました。内部の様子を見ることができたのは非常に貴重な経験であり博物館が研究機関として機能している一面を感じることができました。次に訪れた Museum of London では、ロンドンに注目した展示を鑑賞しました。先史時代から近現代まで、ロンドンがどうあったかを考えるための展示工夫がなされていたと思います。展示の仕方も大英博物館とは異なり、人々の生活の仕方を具体的にイメージさせるような空間づくりがなされていました。ローマ時代の展示では実際のモザイクの床の上に家具などを配置することで、よりその時代の生活が見えてくるような展示になっていたと思います。

● 4日目 — 2月16日

ストーンヘンジとエイブベリーの環状列石を巡る一日でした。ストーンヘンジは世界遺産として有名であり、海外からの観光客が非常に多い遺跡です。小規模な博物館とショップやカフェが併設されており、観光スポットとしての整備が進んでいる印象を受けました。2300年という長い歴史を持つストーンヘンジについて、博物館では視覚的な理解を得やすい大型の画面（壁がスクリーンになったもの）を筆頭として、ストーンヘンジをみる前に簡単な知識が得られる工夫がされていました。実際のストーンヘンジはあまり近づくことはできませんが、遠くからでもその存在感が伝わる点において、人を惹きつけてやまない遺跡であることを感じました。

一方エイブベリーは、ストーンヘンジよりも広範に存在する巨石群ではありますが、あまり著名な場所ではないようでした。あまりにも広範でなかなかイメージがつかめないのが一因であると感じます。そうであってもやはり、

巨石群として訪れる人に歴史の壮大さを感じさせる遺跡であると思います。

この二つの巨石群に関しては、Wiltshire Museum でさらに知見を得ることができました。このローカルな博物館では、展示の工夫について考えたほか、博物館の運営面についても考えるきっかけを得ました。展示内容は非常にすばらしく訪れる人を満足させるであろう空間であるにも関わらず、運営に関してはうまく行かない点も多いという問題を抱えており、博物館運営や文化施策の難しさを感じました。観光客を取り込んでいるのに対して、地域に根ざした博物館として子供向けのワークショップや展示を開催しており、職員やボランティアの方たちの努力がうかがえるところが印象的でした。

●5日目 — 2月17日

Bath で一日を過ごしました。Roman Baths はローマ時代の温泉施設が残されている遺跡であり、当時の施設を半再建した展示空間が作られていました。オーディオガイドを聞きながらの鑑賞は初めてでしたが、展示の解説を読むよりも簡単で、非常に良い博物館体験であると思いました。館内は大浴場を中心として、水路や小さな温泉施設が再構築されているほか、ローマ人に扮した人が登場したり当手を再現する映像資料があったりと、ローマ時代の生活をイメージできるような施設でした。この日のテーマとして、Roman Baths がどうして観光客を惹きつけるのかという疑問がありました。これに対しては、この施設がローマ時代の建築や生活を再構築してテーマパークのように提示していることが考えられます。一方で、多様な文化を経験していたはずのこの場所のローマ時代にだけ注目していることが問題点としてあげられていました。

Bath の街は明るい黄色味を帯びた石の建築が特徴的です。古くからの建築が多く保存されているほか、街全体が遺産として扱われており、歩き回っても飽きのこない場所であると感じました。街自体に歴史が息づいているような印象があり、海外からの観光客が絶えないもう一つの理由もそこにあるのではないかと思います。

●6日目 — 2月18日

ロンドン最終日はウエストミンスターアビーを訪問し、その周辺のイギリスにとって重要な政治的な施設が集まる地区を散策しました。ウエストミンスターアビーは王族を始め、著名人や偉大な功績を残した人物のお墓がある教会であり、教会としてだけでなく、国家政治や文化的側面からも非常に重要な場所であることを感じ取ることができました。

Churchill War Rooms は教会とは対照的に政治的に重要であった場所であり、戦時中の政治の緊迫した雰囲気は今もそのまま持っているという印象を受けました。若い世代には戦争についてあまり具体的なイメージがわからない人も多いと思いますが、チャーチルをはじめとした政治を動かす人々が当時どのような空間にいたのかを理解できる博物館であったと思います。一方 Dennis Severs' House は、全く違った趣向を持った「家」であり、18世紀～19世紀のデニスたちの生活が今もそこにあるような、不思議な感覚を抱かせる場所でした。彼らが使っていたものがそこにそのままあるというのは、おもしろくもあり奇妙でもある体験でした。

この日の最後には MOLA の発掘現場を見学しました。都市における発掘作業がいかに行われているか、また都市の発展と遺跡の保存とをいかにして両立させるかという課題が見えた時間でもありました。発掘が重要なものとしても、建築会社や不動産会社などからすれば邪魔だととらえられることもあり、地方での発掘とはまた違った問題を抱えていることを実感しました。

●7日目 — 2月19日

この日からロンドンを去り拠点はノリッチに移ります。

まずは Must Farm の訪問ですが、ここは bronze age の木造建築が非常に綺麗に残っている遺跡です。感動するほどにすばらしい保存状態で、注目すべき遺跡であると感じました。その日にニュースでも取り上げられていたようですが、出土した車輪を見ることができたのはうれしい限りでした。この遺跡について、これからの発掘に伴ってどのような成果が得られるのか、またパブリックへの還元がどのように行われるのか注目していきたいと思います。

ノリッチ到着後、セインズベリー研究所に向かいました。このプログラムに協力してくださっている場所であり、その研究施設としての性格などに興味がありました。研究所の機能や発足について話を聞くことができ、イギリス

における他国の文化研究について少し理解を深めることができました。

● **8日目** — 2月20日

この日のUEAはオープンキャンパスを行っていたこともあり、にぎわっている印象でした。比較的新しい大学で、もともとの敷地がゴルフコースだったこともあり、建築物に特徴があるキャンパスでした。特に印象的だったのは学生宿舎の建築物で、ガラス張りの階段ピラミッド状の建物は、緑の中であってひとつの街を形成しているようでした。SCVAについては、著名な建築家のデザインであることも含め、1970年代に建てられたものとは思えないような近代的な空間で驚きました。コレクションも素晴らしく、学生たちにとってうらやましいほどに豊かな空間であると感じました。大学構内にある博物館・美術館の役割は大きいと思いますが、このように自然に人が集うような空間デザインはより有効であると思います。

午後にはノリッチの街並みを散策する時間があり、その建築物は非常に美しく感動的でした。特にプリントを利用した建築はほかの場所では見られないものであり、この地域の歴史的な変遷を考えることができました。ノリッチ12については、事前に勉強していましたが、実際に話を聞いて訪れてみると、その選定作業の難しさや維持管理して広報していく過程まで多くの人たちが関わっていることを知り、まちづくりとして重要な側面を担っていると感じました。

● **9日目** — 2月21日

ノーフォークの海岸近くの遺跡をめぐる一日でした。Happisburghは9000年ほど前のヒトの足跡の遺跡であり、オンライン講座で話を聞いていたこともあって楽しみな場所でした。実際には波の浸食により当時の足跡は残っていませんが、浸食により発見され浸食により消えていく遺跡を少しでも目にできたのはよい経験でした。出アフリカした人類がイギリスに到達し残していった足跡から、どのようなことがわかるのか興味を持ちました。

この日めぐった遺跡はどれもそれぞれ貴重なものながら、なかなか一般の人への還元が行われていない遺跡でした。遺跡としての重要性と、その保護の観点だけでなく、どのように人々に遺跡を知り興味をもってもらうかについて考えるのは難しいと感じました。日本においてもそれぞれの場所に多くの歴史が存在している中、それを認識し守っていく重要性を訴えることは簡単ではありません。歴史を地域に根づかせ伝承する方法を模索するのはいつでも難しいことですが、認識の少ない史実や新しい調査結果など、これからの文化政策でカバーしていかななくてはならない分野は多くあると感じます。

● **10日目** — 2月22日

Norwich Castleは11世紀からの建築物が一部保存されている点で、ノリッチでも特に歴史的な場所でした。ノルマン時代の遺物の保存と展示だけでなく、第一次・第二次大戦やエジプト考古学、ノリッチに関わる絵画や自然史などについての展示も充実していた点が興味深い博物館でした。古くからノリッチに存在していた場所で、ノリッチがどのような歴史を経験してきたのかを学ぶことができるのは良い経験であると思います。

Caistor Roman Townについては、アプリをダウンロードして楽しむことができる遺跡であり、初めての経験でした。調査後の広大な敷地には石の塀のほか目立つ遺物は存在していませんが、遺跡の保存を行いつつ観光客を取り込む戦略としてアプリを活用する点に、遺跡を人々へどう広報し知ってもらうかへの尽力が見て取れました。発掘がどのように行われたか、どのような成果が得られたかだけではなくなかなかイメージがわからない歴史について、画面上にローマの街を再構築することで当時の生活のイメージを与えるというのはよい考えだと思います。

● **11日目** — 2月23日

Norfolk Historic Environment Serviceでは、ノーフォーク州での遺跡管理について多く話を聞くことができました。データベースでの一般公開は多くの詳しい情報を得られる点で、日本と異なっていると感じました。膨大な数の遺跡を管理するのは簡単なことではなく、市民だけでなく州や国との関わりも考えなくてはならない難しい仕事であると感じました。

Thetfordでの話も興味深く、政府の指示により森林の管理が行われていること、そして森林だけでなく遺跡に

関しても保護が行われていることなど、活動の多様さに驚きました。この日はウサギの養殖場の遺跡だけでなく、旧石器時代に作られた可能性のある盛土なども見学でき、森林の中に多くの遺跡が残っていることに感動しました。また、測量作業を久しぶりに行うことができたのもいい経験でした。

●12日目 — 2月24日

フリント鉱山はとても興味のある場所であり、ノリッチの多くの建築物がフリントからできていることを考えると、途方もない量のフリントが運ばれてきたことが予想されます。実際の Grime's Graves は広大な敷地に多くの採掘跡があり、昔からフリントがその近辺で使用されてきたことを実感できました。洞窟の中は初めて見るような空間で、実際にフリントがチョークの中に埋まっている様子を見ることができてよかったです。また、Thetford の博物館では、フリントと黒曜石を同時に展示しており、長野県の黒曜石産地との関係を持っているという活動の活発さに驚きました。また、長野県に建設されたフリントの建築物を是非訪れたいと思います。

●13日目 — 2月25日

最終日はサットンフーを訪れました。この遺跡の主要な研究者である Martin Carver 氏から直接お話をうかがう機会があり、この遺跡の希少性と重要性に感動しました。いくつかの盛土のなかに船が埋まっているという光景は、想像するだけで圧巻でした。アングロサクソン時代の文化の素晴らしさだけでなく、サットンフーの当時のランドスケープがどのようなものであったのか、彼らにとって船とはどのようなものだったのかについて考えるきっかけを得ることができました。それと同時に、初日に訪れた大英博物館でのサットンフー出土品の展示と、サットンフー現地でのレプリカ展示については少し違和感を覚えました。非常に素晴らしい遺物が残っている反面、その所属先や一般への公開に関する問題は尽きないと感じます。

◎ 結 び ◎

この2週間のプログラムでは多くのものを目にすることができました。日本との違いを感じながらも、イギリスという国に博物館や歴史・文化がどのように根付いているのか感じることもできたと思います。ランドスケープという言葉をよく使用していましたが、やはり経年的にランドスケープがどのように変化していき、またそこにいる人々をどう変化させていったかを意識することで、文化の変容についてより理解できるようになったと思います。

また、歴史や文化だけでなく、それらを維持管理していく側面についても考えを深めることができました。遺跡について市民に情報公開することだけが重要なのではなく、研究を深めることもまた重要であり、そのバランスをとりながら運営していくことの難しさを認識しました。文化施策として一方的に扱うのではなく、様々な人との対話の上に遺跡を保存活用していかななくてはならないと思います。

非常に短く感じられた2週間でしたが、研修前後の期間を含めてプログラムを支えてくださった先生方や事務の方々、また多くの時間を共有し楽しませてくれた友人たちに感謝します。これからもより一層学問を深めていきたいと思っています。

● 1日目 — 2月13日

今日は大英博物館に集合し、サム・ニクソン先生の解説を聞きながら館内を巡りました。非常に分かりやすい解説で、事前に受講したオンライン講習も理解の助けになりました。

● 2日目 — 2月14日

ロンドン市内を、観光バスのツアーとテムズ川クルーズで回り、ビッグベンなどの名所を見ながらロンドンの街の大まかな全体像を把握しました。一方、徒歩での移動中は歴史的な建物や場所について、周囲の景観（landscape）との関係性や、現在と過去とでの機能や景観の変化といった視点から解説を受けました。プログラムを通じて、個々の遺跡や建物だけでなく、それを取り巻く landscape 全体で考える視点を学びました。午後はテート・ブリテンを見学しました。

● 3日目 — 2月15日

今日は大英博物館の日本部門とイギリス・ヨーロッパ部門を見学しました。それぞれの部門で、担当キュレーターの方から貴重な資料を見せて頂き、非常に興味深いお話を伺いました。その後、ロンドン博物館を訪れましたが、ロンドンの歴史の推移を一つのストーリーとして、子どもにも分かりやすく提示していました。大英博物館では資料そのものの展示に重心が置かれて、ストーリー性は付与しない傾向があるように感じられ、二館で違いが見られました。

● 4日目 — 2月16日

今日はロンドンを離れ、イギリス南西部に位置する Devizes という街に一泊しました。伝統的な外観の建物が並び、こじんまりした美しい街でした。共に巨石群の遺跡であるストーンヘンジとエーブベリーを訪れました。夕方には主に地元の歴史を展示しているウィルトシャー博物館を見学し、館長の方からお話を伺いました。お話の中では、地方の博物館が公的資金を十分に獲得することの難しさという点では日本の状況と通ずる所がありましたが、投資の利益で運営資金を一部賄っているという点は意外に思われました。

● 5日目 — 2月17日

Devizes を発って Bath の街を訪れました。街の名前の元になった、古代ローマの浴場の遺跡を見学し、その後街中を巡って 1700 年代のジョージ朝建築などを見ました。街中のツアーでは、有資格のボランティアの方がガイドでした。前日のウィルトシャー博物館でもかなりの人数のボランティアが館の活動を支えているとのことで、イギリスの博物館や文化遺産事業におけるボランティアの重要性がうかがわれました。

● 6日目 — 2月18日

今日は中世に建立されたウェストミンスター寺院、大戦期の遺産であるチャーチル内閣戦時執務室、ごく普通の伝統的なロンドンの家を再現した特異な Dennis Severs' House を訪れました。それぞれ時代も性格も異なる歴史遺産で、考古学や文化遺産研究の対象の幅広さを感じました。また、ロンドン博物館による発掘現場を見学しました。ロンドンの大都会での発掘は、都市開発と隣り合わせで行われるため、文化遺産保護と経済発展の折り合いが特に問題になりやすいようでした。

● 7日目 — 2月19日

今日からセインズベリー日本藝術研究所のある都市ノリッチに移動しました。Must Farm という、近年発見された重要な先史時代の遺跡の発掘現場を見学しました。今まさに重大な調査、発掘がされつつある現場を訪れることができ、非常に刺激的でした。同時に、発掘中ながら現場が一般へ公開され積極的に紹介されており、SNS 等でも常時発掘状況が発信されているのが印象的でした。専門的な調査研究は一般市民に対して閉鎖的なイメージがあったのですが、この発掘地を含めプログラムを体験していく中で、少なくともイギリスでは一般市民に対し窓口を開くことが重視されていると感じました。

午後はセインズベリー日本藝術研究所を訪問し、そこでグループでの短い発表をしました。私のグループのテーマは、大英博物館とロンドン博物館の比較でした。英語で自分の考えを人に伝える、いい練習になったと思います。

● 8日目 — 2月20日

午前中はイーストアングリア大学のキャンパスを見学し、付属のセインズベリー視覚藝術センター (SCVA) を訪れました。ノリッチ自体は中世以来の街並みや建築が残る歴史的な街なのに対し、同大学のキャンパスはコンクリートとガラスの非常に近代的な建物が並んでおり、ノリッチの景観の中では異色でした。特に、ノーマン・フォスターが設計した SCVA の建物は近未来的な印象でした。その後、ノリッチの歴史遺産について、経済効果や街の再開発の観点から話を伺い、実際にノリッチの歴史遺産を回りました。

● 9日目 — 2月21日

今日はノーフォーク州の海岸沿いにある遺跡を複数訪れ、またイギリス女王の地所にも行きました。最後に、King's Lynn という、かつて貿易で栄えた港湾都市を訪れました。

● 10日目 — 2月22日

午前中はノリッチ城博物館を訪れ、午後は Caistor にあるローマ時代の遺跡を見学しました。ノリッチ城博物館は、建物自体が元は中世に建てられたもので、建物を中世当初のデザインで再現する計画が進められていました。Caistor では地形調査の成果を元にした、ローマ時代の街並の再現画像が見られるスマートフォン向けアプリを実際に使ってみました。

● 11日目 — 2月23日

午前中はノーフォーク州の HES (歴史環境サービス) を訪れ、同州の歴史遺産の記録システムとデータベースなどについて話を伺いました。午後は Thetford という森林を訪れました。森林には先史時代から戦後まで幅広い考古学遺跡が存在しており、その中にある先史時代の埋葬塚とされる遺跡で調査体験をしました。

● 12日目 — 2月24日

午前中は Grime's Graves という、フリント採掘の考古学遺跡を訪れました。一般には公開されていない採掘坑に特別に入れて頂き、貴重な体験ができました。午後は、ノリッチの歴史遺産の専門家である Brian Ayers 氏の解説のもと、ノリッチの考古学遺跡や歴史建築をまわりました。ノリッチは中世以来の歴史的な建築や街並が非常に良く残っているものの、そうした歴史遺産をどう観光などの経済効果に結びつけるか、都市開発と歴史遺産保護の両立が問題として提起されました。

夕方はイーストアングリア大学でレセプションに参加し、イギリス側の学生一人と共に、ごく短いスピーチをしました。緊張しましたが、お陰で少しだけ度胸がついたようでもあり、良い経験になりました。

● 13日目 — 2月25日

今日はサットン・フーの遺跡と博物館を見学し、発掘を指揮された Martin Carver 氏のお話を伺いました。お話では、一度に遺跡全体を発掘してしまうと、発掘当時の技術や知識に基づいて全ての答えを出してしまうため、一部のみ発掘する方針をとった、と言われていたのが印象的でした。私は美術史を専攻していますが、関心があるのは古代ローマの絵画で、対象となる作品は主に発掘された建物の壁画です。自分の関心からいえば、今後も発掘が進むことでより多くの壁画が見られるようになることを望んでいます。他方、現代の発掘技術が非常に進んだものではあっても、より時代が進んでから振り返ると、おそらく現代の発掘も何らかの点で遺跡の持つ情報を消失させてしまっている部分があるのだろう、ということに今回のお話で気づかされました。

夜は、ゴーストツアーというものに参加しました。ガイドの方が街の史跡を、怪談と結びつけながら紹介してくれる、とても面白いものでした。こういう史跡の紹介の仕方があるのかと新鮮でした。

◎ 結 び ◎

今回のプログラムの内容はイギリスの考古学が中心でしたが、参加してみると自分のように考古学の専門でない学生にとっても非常に興味深かったです。むしろ、専攻とは異なる視点から歴史文化遺産とそれを取り巻く環境について学べたことで、視野を広げる機会になったように思います。

また、日本の文化制度について関心を持ち考え直すきっかけにもなりました。文化事業や博物館のために資金を集めること、一般の人や地方自治体の理解を得ることは日本でも大きな課題だといえます。特に近頃は国公立大学の人文系学部の統廃合が問題になるなど、歴史遺産や文化に対して、必ずしも市民や公的機関の理解や関心が得られていない面があるようにも思います。イギリスでも、経済状況などの要因から資金獲得はやはり課題になっているようですが、専門家を含め文化事業に携わる人々が積極的に一般の人の関心を集め理解を促進する姿勢や体制が整っているように思われました。

さらに、個人的には古代ローマ美術に関心があるため、イギリスにおけるローマ時代の歴史遺産は、ローマ周辺とはまた違い先住民の文化と影響し合っている点が興味深かったです。

最後になりますが、このプログラムを企画運営してくださり、渡英前、プログラム中を通じ大変お世話になりましたセインズベリー日本藝術研究所、イーストアグリア大学、東京大学文学部の先生方、職員の方々、及びプログラム中に貴重なお話を聞かせていただいたり、時間を割いて案内していただいた全ての方々に、心よりお礼を申し上げます。

今回の冬期プログラムのテーマである「イギリスにおける歴史文化遺産」について、プログラム中に学んだこと・感じたこと・考えたことをまとめたいと思います。

1. 博物館・美術館

(1) 国の中心となる博物館 (British Museum, TATE Britain)

大英博物館はイギリスの博物館の中心にある博物館であり、同時に世界史の中心にある博物館です。

この博物館では、実際の展示と博物館の裏側である研究者のゾーンを、今回のプログラムでは見学しました。実際の展示では、大英博物館の目玉である古代エジプト・古代ギリシャだけでなく、イギリス史の分野も解説を聞きながら見学しました。古代エジプト・ギリシャには観光客が殺到し、世界の博物館という言葉がふさわしい状態でしたが、イギリス史には英語が理解できる人（非イギリス人含む）のみが見学している印象を受けました。観光客の多くは素通り、あるいは音声ガイドのあるところだけ見学している様子でした。現在大英博物館で保存されているものを発掘された国に戻すか戻さないか、という問題が出ているようですが、安全と保全の面から、私は両国とも複製を展示し、本物は倉庫に保管する、というのが一番いいと思います。ただ本物が人目に触れない、というのも悲しいことです。年に2回本物の展示に切り替える日を作るなど本物の展示も同時に行うと良いのではないかと、思います。展示方法は関連のある分野を連続して並べる、なるべく発掘された場所を再現して壁画や門の彫刻を配置する、実際に触ることのできるコーナーを設けるなど工夫が凝らしてありました。ただ、どこの部屋が最も古いのかわかりにくい為、時代を逆走してしまったことがあり、順番の明記をして欲しいと思いました。

青銅器時代の研究者の方の話をついた時に、調査したものは大英博物館だけに留めることなく、発掘場所近くの博物館に渡す場合もある、と仰っていたことが印象に残っています。イギリス国内では、考古学的なものに関して、大英博物館—地方の中心都市・大都市の博物館—各地域の博物館、という構図がはっきりと確立され、情報や史料のやり取りが行われていることがよくわかる一面でした。日本はどうなのでしょう。博物館同士の結びつきを展示に活かすことができたなら、また博物館と考古学的な場所の結びつきを展示に反映させたら、新しく人の流れを生み出すことができると思うのですが。

所蔵品のデジタル史料化とその公開の準備が大英博物館ではかなり進んでいる、と印象を受けたのですが、日本ではどうなのでしょう。大英博物館が世界スタンダードで日本が遅れすぎているのでしょうか。日本で難航しているのはやはり資金不足でしょうか。国を越えた博物館や美術館での交流は行われていないのでしょうか。疑問ばかり並べてしまいましたが、実際に感じたことです。3年の間にこれらに対する疑問が解ければ、と思います。またもし日本で進んでいない場合、それを導入する役目を果たせたらな、と思います。

テートブリテンは元々テートモダンと1つの美術館であった、というのは知りませんでした。ロンドンの中心から少し外れているからか人が少なく静かな印象でした。この美術館で感じたのは、現代アートは一体どの時代から始まっているのか、ということです。テートモダンが現代芸術の美術館、テートブリテンはそれ以前のイギリス芸術を中心に集めた、と聞いていましたが、1930年代以降の展示は現代アートと言ってよいような気がしました。またテートブリテンにはイギリス人が親しみを覚えるという田舎の風景が多く飾ってありましたが、見学している人は、私の主観ですがV&Aやナショナルギャラリーに比べて少なく感じられました。イギリス人の中のイギリスのイメージも変わってきているのかもしれませんが、そういった意味でもテートブリテンは、変わりつつあるのかもしれないです。日本にも数多くの美術館がありますが博物館の住み分けと言いますか、立地が悪くても人を惹きつけるような1つの特色を持つ必要があるのかもしれませんが、これは個人的な感想ですが、ラファエロ前派を日本でたくさん見たからでしょうか、テートのラファエロ前派は想像していたよりも展示作品が少なく、またこれらがラファエロ前派、という分かりやすい展示はされておらず残念でした。

国の中心となる博物館というのは、その国の文化的側面の顔を象徴していると考えられます。ネット上では大英博物館は盗品展示場などと（ふざけて）揶揄されることもあります。実際に訪れて感じたのは素晴らしさでした。特に感じたのは、博物館ならではの、本なら決して隣に並ぶはずのないモノたちが同じ空間にあるという不思議さです。世界にはこんな文化が広がっているんだ、という感情は博物館にきた人のその後に確実に影響を与えるはず。その時抱いた感想によって博物館や研究の道に進むことを決める人というのが少なからずいると思うので

す。そういう意味でも大英博物館の果たす役割は大きいと思います。

(2) 地方・街の中心となる博物館 (Museum of London, Wiltshire Museum, Norwich Castle Museum, Thetford Ancient House Museum)

地方や大都市の中心となる博物館に必要な要素は、2種類である、と今回の訪問で感じました。まず、その博物館がある地域についての詳しい展示・解説です。来館者はその都市・地方のことを知るために博物館に行くわけですから、その地域についての展示は不可欠です。しかしこれだけではダメなのだ、ということを感じました。来館者がある国、都市や地方出身ならいいのですが国外からの来館者はその国の歴史に詳しくないことが多いです。そのような人にとってありがたいのが世界史的な視点・大きな歴史の中でのその都市の立ち位置が示されること。このようなことが起きている時にここではこうだったのか、自分の国のこの時代とこの地域のこの時代が同じ頃なのか、という感覚は無意識の比較に繋がりますし、歴史への共感・興味を持ちやすくなります。この視点から考えると Museum of London・Norwich Castle Museum よりも Wiltshire Museum の展示の方が旅行者向けだと言えます。

ただ、ロンドンという都市は世界史の中心に何度かある世界的に重要な都市である為、ロンドン史＝世界史になる部分も多く、世界史的な視点を敢えて配置する必要がないとも言えるかもしれません。

また、Wiltshire Museum は、イギリス・フランスのノルマン人の城との共同研究やノリッチに縁があるエジプト展示など独自要素が濃く見られたように思います。

(1) でも書きましたが、独自の強み、というのが必要とされている時代なのかもしれません。また印象に残っているのは、3つの博物館のどれも子供向けのコンテンツを重視していた、という点です。博物館分類法でいうところの第三段階参加型の博物館が多く、子供向けコンテンツのノウハウもしっかりと確立されているな、と思いました。日本の博物館・美術館が手本とすべき点は沢山あると思います。

(3) その他の博物館 (Churchill War Room, Denis Severs' House)

ここであげた博物館はある特定のテーマに絞って展示されている博物館です。

Churchill War Room は第二次世界大戦中の内閣執務室であり、当時の指揮の様子やドイツの空襲に備えての生活が垣間見えます。簡素ではありますが、日本に残る防空壕などと比べるととても豊かでこれは大戦負けても仕方ないな、と感じてしまいました。また所々にあるデータや地図が厳しい状況を示していて戦争を感じさせます。しかし、戦争の悲惨さ、というのはあまり感じませんでした。戦勝国の展示だからでしょうか、執務室だからでしょうか、そこまではわかりませんが、感情に訴えかけてくるようなものはありませんでした。部屋の装飾のように簡素で硬い印象でした。

Denis Severs' House は、Churchill War Room とは対照的に生々しい印象を受けた博物館でした。ついさきほどまで人がいたというよりも、その場に住人がいるけれどそれは透明人間で私たちには見えない、と言った方が正しい気がします。部屋の匂いやほの暗さ、そして空気感が五感に19世紀を訴えてくるような場所でした。日本で何度か昔の暮らしを再現した農家に入ったことはありますが(江戸東京たてもの園)、比べ物にならない強烈さでした。私設でなければ決してできない試みだと思いました。いつか夜話を聞きながらお酒を飲む、というコンテンツに参加してみたいです。

博物館の形態の幅広さとともに、自分が今生きているこの瞬間も歴史になるのだ、というとても当たり前だけでも忘れがちなことを思い出した経験でした。

2. 街全体

(1) ロンドン

ロンドンの奥深さをただただ感じた、という気持ちです。確かに歴史は知っていました。ローマ人が作った植民地ロンドンニウムが元で、ノルマン時代から発展し、産業革命以降世界の中心となり、現在でも世界屈指の大都市という知識はありましたが、ここまで体感するとは思っていませんでした。街の中に未だローマ時代の遺跡が残る、

現在でも発掘が続いている、その現場を見ることができたのはまたとない体験でした。街を歩いたときにステュアート朝時代の寺院やジョージアンスタイルの建物群、チューダー朝の木造建築、近代的なコンクリートとガラスのビルが混在している様子も不思議でした。一方で、街の発展と保存・修復の両立の難しさも感じました。最近まで聖ポール大聖堂のドームの直線上には高層建築を建ててはいけないと法律で決まっていたそうですが、その法律も無くなり今後高層建築ばかりになってしまうのかと思うと残念です。ただきちんと考古学チームが整備されているので守られるのではないかとも思っています。日本には、というより東京には Museum of London Archaeology のような団体はあるのでしょうか。東京にも江戸時代の守るべきものが沢山眠っていると思うのですが、日本ではやはり難しいのでしょうか。

(2) バース

バースは旧市街が世界遺産に登録されており、ジョージアン様式の建物が連なっています。ここも歴史が古くローマ以前から温泉の存在を知ったケルト人達の神殿があったと言われていました。しかしバースにはローマ時代を感じさせるものは Roman Baths くらいしか残っておらず、現在の街並みの下に多くは埋まっています。歴史が積み重なった1つの形が Roman Baths の建物だと感じました。外観はジョージアン様式なのですが内部にローマの遺跡がある、という状態は、18世紀当時の様子とローマ時代の様子が混ざり合い不思議な様子でした。

(3) ノリッチ

ノリッチは現在イギリスの主要な高速道路から少し外れたところにあり観光客が少ない、と言われていますが、産業革命期に中心がマンチェスターやリヴァプールに移ったことで逆に中世の街並みが残っている街です。ノリッチが市内の観光業や建物の保存にどれくらいのお金を使っているのか私にはわからないのですが、ロンドンやバースよりもまだ整備されていないところが多いように感じました。整備されていない、というか活用しきれていない、と言ったほうが正しいかもしれません。ヴァイキングやノルマン時代のことをもっとアピールしても良いと思いました。しかしその為には観光客が増えてお金を落としてもらう必要があるとも思います。北海沿岸との結びつきをもっと強くとすると良いのかもしれません。

ノリッチの抱える悩みというのは、日本の多くの市町村が抱えている悩みと共通していると思います。良いものを持っているのに、交通の関係でどうしても客を呼び込みにくい、という悩みを抱える世界中の市町村で協力したりできないのでしょうか。やはり全てはお金によって解決するしかないのでしょうか。

3. 遺跡

私自身があまり遺跡に行ったことがなく、初めて知ること、経験することばかりのため、考えたことよりも感じたことがメインになっています。

(1) 世界遺産 (Stonehenge)

とてもしっかりと保護されている、という印象を受けました。遺跡の保護はかくあるべし、という感じがします。しかし一方で遺跡がとても遠い存在に感じられ、私だけかもしれませんがオブジェの一種のようにも感じられ、本来あった儀式的な要素は失われてしまったようにも思います。本物ではないけれど、ビジターセンターの近くに建てられた当時の住居の再現施設のほうが当時の様子を想像できた気がします。保護を重視し人々から離すことはある程度は必要ですがやりすぎもまた良くないのではないのでしょうか。

(2) 整備済の遺跡・保全されている地域 (Avebury, Sandringham Estate, Caistor Roman Town, Thetford forest, Grime's Graves, Sutton Hoo)

ここにあげた遺跡達は Stonehenge ほど厳重に保護されている感じは感じられず、見る人たちとの距離感がちょうどよかったように感じました。Caistor Roman Town のアプリを使った試みというのもとても面白かったです。ここにあげた遺跡はどれもビジターセンターがきちんと整備され、初めてきた人たちにも分かりやすいような工夫

がなされていたと思います。同年代の遺跡同士や地元の博物館、大英博物館と連携を取るなど全体で遺跡を盛り上げるようなことをしたらもっと良いのではないのでしょうか。

また観光客も基本イギリス人中心であり外国人観光客をターゲットに据えていないような印象を受けました。自国の観光客だけで経営が成り立っているのはなぜなのでしょう。バックの団体がしっかりと機能しているからなのでしょう。それとも単純に日本とは異なり訪れる自国の観光客が多いからなのでしょう。世界遺産にしなくてもしっかりと守る事のできる環境が整っている、というのは本当に素晴らしいことだと思います。日本の文化財保護との比較をしてみたいです。

(3) 未整備の遺跡 (Must Farm, Happisburgh, Western Runtan Mammoth, Warham Camp, Brancaster Roman fort, Hunstanton beach)

ここにあげた遺跡は遺跡と言っているのかわからないほど普通の場所で、しかし素晴らしい発見がなされた場所、という共通点があります。Must Farm は現在発掘中でこれからどのように保存するのか、ビジターセンターを設置するのか、などがわかると思います。それ以外は基本立て看板と説明書があるだけの場所です。ここを訪れて生まれた疑問は、そもそも保護に意味はあるのか、ということです。意味はあると思いますが、過剰に保護をして人々を沢山呼び集めることは、遺跡にとってどれくらい大事なのか、ということがわからなくなってしまいました。遺跡は研究対象なのか、保護すべき環境なのか、金の成る木なのか。立場が変われば見方は変わるでしょう。地元の人から見たらその遺跡を目玉にして観光業を発展させたいでしょう。しかし人がたくさん来ればそれに比例して現状維持が厳しくなります。何がベストなのか私にはまだわかりません。バランスが大事、という事しかわかりません。また考古学的には発掘することなくレーザーなどで中を見られたらそれでも十分なのかもしれませんが、美術史の立場としてはやっぱり本物を見たい、見なければならぬのです。難しい問題です。この疑問は今後この世界に居続けた場合ずっとついてまわる問題だと思います。現状維持は何も遺跡に限った問題ではなく、建築物や住環境など別の文化・芸術分野にもあるからです。自分なりの答えが見つかるように考えていきたいと思っています。

*プログラム終了から約一週間後に書いたせいか、所々忘れ始めてしまっているのが大変悔しいです。もっとたくさん感じたことはあったはずなのに、と思います。

今回のプログラムを通して考えた事、学んだことをまずは目の前の2年間でじっくりと考えていきたいと思っています。

冬期プログラムに参加させていただき本当にありがとうございました。本当に貴重な経験ができました。この経験を生かすも殺すも私次第ですが、最大限生かす方向に今後進んでいきたいと思っています。

「ヒト・モノ・カネ」の視点からみた日英文化制度比較

1. はじめに

このたび、東京大学文学部冬季特別プログラムに参加し、2016年2月13日～26日の間、ロンドン、ノリッチをはじめとしたイギリス南部の諸地方に滞在し、イギリスの文化遺産・文化政策について、考古学や文化施設の現場にて体験的に学ぶ機会を得た。

私自身の個人的な関心を端的に紹介すると、学部ではドイツ文学、特に戦後ドイツ映画を専攻していた。また課外活動として運動会馬術部に所属し、三鷹市スポーツ振興課などと協力しウマを用いたスポーツ振興・地域振興の活動に取り組んだ。そのような経験からウマを初めとする動物の果たす文化的役割に関心が高まり、卒業研究ではドイツ映画における動物の役割について取り上げた。2016年度からは人文社会研究科文化資源学研究室に進学し、動物の果たす文化的役割や、そこから派生して文化施設やそれをとり巻く制度、歴史的建築や映画といった文化的表象と動物とのかかわりに関心を広げ研究を展開していくことを考えている。

そのような関心を持った視点から、今回のプログラムで最も印象的だったのは、美術館・博物館・遺跡といった文化施設を訪れ体感した、日本との比較におけるイギリスの文化制度の様々な特色であった。文化施設に限らず、施設・団体を構成する重要な要件として、「ヒト・モノ・カネ」があげられるが、本稿ではこの3つの要件に注目し、日本との比較においてイギリスの文化制度をとらえることで、筆者が本プログラムで受けた興味や関心の一端を明らかにしたい。

2. 「ヒト」からみた日英文化制度比較

2-1. 文化政策における地域住民・ボランティアの積極的なかかわり

イギリスの文化遺産について学ぶ中で最も印象的であったのが、文化政策における地域住民・ボランティアの積極的なかかわりであった。今回のプログラムでは数多くの文化施設や遺跡を訪れたが、4日目のストーンヘンジやウィルトシャーミュージアム、5日目のバース、11日目のセットフォードでは、地域の文化遺産に関心を持つ一般の人々が、学芸員などのプロフェッショナルの人々を良好な関係を保ちつつ文化施設において重要な役割を果たしているのが理解できた。特にデヴィージーズやバースといった、地方都市における地域住民の主体性が強く感じられた。ボランティアの主体性という意味では、10日目に訪れたケスター・セント・エドモンドにおける地域ボランティアの男性によるディスカッションが印象的であった。彼は自身の関わる地域コミュニティにおける発掘調査プロジェクトに関して、日本との比較の視点を提供しながら説明してくれたのだが、その口調からは、調査・研究、資料の保管、公開・教育という本来美術館が持つ機能を、(実現可能性は別として)地域コミュニティの中において実現させようという情熱が感じられたからである。日本では文化遺産や文化施設の維持について、国や自治体、あるいは専門職の学芸員が担うべきという意識が根強い。それがひいては学芸員をはじめとする文化施設の職員の負担増加、いわゆる「雑芸員」化につながっているのではないだろうか。地域振興という観点において、関心を持つ地域住民を文化施設の運営に参加させることは活動の主体を増やすことができ極めて重要であるし、予算・人員に限りがある文化施設の業務の効率化や職員の負担軽減にも極めて有効であるといえる。地域文化に関心を持つ高齢者層の新たな社会参加のチャンネルを開く可能性もある。社会に根付いた意識を変えるのには長い時間が必要であるが、地域住民の文化施設への参画について、日本においてさらなる取り組みと議論が必要であることを痛感した。

市井の人々の地域文化への関心という意味でもう一つ特徴的であったのが、金属探知家(metal detectorist)の存在である。イングランドにおいて金属探知がポピュラーな趣味として定着しており、彼らの存在が社会的に認知されていることは、本プログラムに参加するまで全く知らず、驚きを感じるとともに文化の違いを強く感じた。さらに印象的だったのは、政府や地方団体がそういった活動を禁止するのではなく、Treasure ActやPortable Antiquities Schemeといった公的な支援の枠組みを用意し彼らのエネルギーを文化振興に活用しようとしているこ

とであった。日本では金属探知の文化は皆無であり、また仮にそういった活動が展開されたとしたら、公共団体はそれを抑圧する方向に動く印象がある。金属探知家という存在はイングランド特有の現象であるかもしれないが、市民の情熱を活用しようとする公共団体の姿勢は日本においても見習うことができるものであると感じた。11日目にグレッセンホールの Norfolk Historic Environment Service 事務所にて金属探知家および Portable Antiquities Scheme の方から直接話を聞く機会があり、大変参考になった。

2-2. 文化行政に携わる人々の力～NorwichとKing' s Lynnの比較を題材に～

プログラム後半はイングランド東部の都市ノリッチに滞在し、ノーフォーク地方の文化遺産・文化政策について学んだ。特にノリッチの都市政策について、8日目にその立役者ともいえるマイケル・ラブデイ氏から講演とフィールドワークを交えて詳しく教授して頂き、ノリッチの歴史的建造物群「Norwich 12」をはじめとする、文化遺産の広報戦略について学ぶことができた。その理解がさらに深まったのが、9日目、ノーフォーク東岸の都市キングス・リンを訪れたときであった。キングス・リンは14世紀イングランドにおいて海上貿易で繁栄し、ハンザ同盟の重要都市として数えられた都市であり、今でも Grade I（第一級建築物）をはじめとする歴史的価値の極めて高い建造物が数多く残っている。街並みの完成度、統一感という意味で見ればノリッチを凌駕している印象があった。しかし、数多くの観光客が滞在し活況を呈しているノリッチに対し、（滞在したのが日曜の夕方ということもあるが）キングス・リンには人の姿は我々一行以外にはほとんどなく、さながらゴーストタウンのようであった。歴史的建造物についても、説明板が見にくかったり小さかったりなど、ノリッチに比べて広報活動のつたなさは否めなかった。

今まで地域の文化政策に携わる人々の話を聞くことはあっても、それを体感する機会は少なかったのだが、高度な歴史的景観や遺産を持ちながらもそれを十分に活用できていないキングス・リンの様子を見るにつけ、ノリッチにおけるラブデイ氏をはじめとする文化政策担当者の奮闘が対照的に明らかになり、改めて文化政策・広報活動の重要性を体感する機会を得た。我々はどうしても景観や都市を見るとき、今の風景を所与のものとして考え、そこに至るまでの背景や背後にいる担い手たる人々の存在を忘れがちである。文化的表象に対する複眼的視点を改めて認識することができた。

2-3. イギリスの人々の温かさ

プログラム全般を感じて強く感じたのが、イギリスの人々の温かさであった。例えばイギリスでは、初めて会ったバスのドライバーやレストランのサーバーとも親しげに会話することが普通であるし、初対面の人でも分け隔てなく親切にしてくれるという印象があった。筆者はプログラム期間中、ヨーク大学の学生とルームシェアをしたのだが、初日から日本とイギリスの違いやお互いの専攻や背景、興味関心について、かなり突っ込んだ話をするのができ、想定していたよりかなり早い段階から信頼関係を築くことができた。何よりイギリス人は人と話すことが好きなのだ、という印象をもったし、そういった一種の国民性が文化制度に影響を与えていることは紛れもない事実であると思われる。

議論における立場の平等さも魅力の一つだった。例えば講師や教授に向っても、日本のように遠慮したり距離を置いたりすることはなく、率直な疑問をぶつけてくる。これはイギリスの教育制度が多分に影響しているのではないかと感じた。筆者のルームメイトは、イギリス最古のボーディングスクールとされる Winchester College の出身なのだが、日英両国の教育制度について話す機会があった。筆者が日本の教育は教師と生徒の立場の差異がまだ大きく、従って授業もややもすれば教師から生徒への一方的な知識の伝達になりがちである、ということの説明すると、彼は驚いてこう答えた。「私のボーディングスクールでは、教師は生徒に知識ではなく、いかにして教師を論破するかを教えた。」この言葉にイギリスの教育の精神が端的に表れているように思う。個人的な話では、筆者自身も日本の全寮制中高一貫校の出身であり、中高時代の様々な体験を彼と共有でき非常に楽しい時間を過ごすことが出来た。

3. 「モノ」からみた日英文化制度比較

3-1. 多様な展示品とそのあり方

プログラム前半ではロンドンに滞在し、大英博物館やテート・ブリテンをはじめとする様々な文化施設を訪問したが、まず圧倒されたのはその収蔵品の圧倒的な量と種類であった。1日目、3日目に訪問した大英博物館では、その広大な敷地と収蔵品の量と質、その種類に圧倒された。2日目に訪れたテート・ブリテンでは一つの美術館でイギリスの近代絵画史を展望できることに驚きを禁じ得なかった。世界の知識を網羅する意図をもって施設が設計されていることがあらためて体感できた。

驚きであったのが、10日目に訪問したノリッチ城博物館であった。日本で地方都市の博物館の常設展という、どうしても地域史に特化した展示、さらにいうなればその館の所蔵品の範囲の限界を暗に示す展示内容となりがちであり、筆者は訪問前にはそういった展示を想定していた。しかし実際には、ノリッチ城にまつわる中世・近代の展示物にとどまらず、先史時代、ローマ時代の展示品や近代絵画、果ては二次大戦中の軍事品や多種多様なく製な自然史的資料、エジプト王朝のミイラなど、多岐にわたる展示が存在し、地域の博物館というよりも、世界の知識を俯瞰するという大英博物館などの意図を継承しミニチュア化した施設のように思えた。ノリッチ城博物館には展示品寄贈の伝統が根強くあり、それが展示の多彩に結びついているようにも思われた。一方で、寄贈者への配慮から展示の柔軟な旧レーティングが難しくなっている現状も垣間見え、展示全体の印象としてやや総花的で散漫な印象があるのも否めなかった。多くの寄付が必ずしも博物館の質の向上に結び付くのではないというのは極めて新鮮な印象であった。

展示品において他に目を引いたのは、昔の衣服を着ることができたり、エッチングの作成の過程を体験できたりといった、体験的な展示が極めて多く用いられていることであった。

特に3日目のロンドン博物館、4日目のウィルトシャーミュージアム、10日目のノリッチ城博物館、12日目のThetford Ancient House Museumなど所在する地域に根付いた展示を特色とする文化施設にその傾向が顕著であった。地域の学校の体験プログラムや関心を持つ地域住民のボランティアも積極的に受け入れているという話を聞き、地域の施設として地域住民とつながりをもち、地域の施設として一定の責任と役割を果たそうとする高い意識と公共性が感じられた。

3-2. ICTと文化施設

本プログラムにおいて強く感じられたのが、文化遺産・文化施設におけるICT（情報通信技術）の普及であった。10日目に訪問したCaistor St EdmondではAR（拡張現実）技術を用いてアプリケーション上で在りし日の遺跡の姿を再現することができるユニークな試みが行われていた。遺跡の保存や学術的側面から、あえて発掘調査を行わず、ARや空中からの赤外線調査など非侵襲的な調査方法を用いることは極めて重要であるし、それが発掘調査に劣らず一定の成果をもたらすものであることを再認識できた。11日目にはGressenhallのNorfolk Historic Environment Serviceを訪れ、ノーフォーク地域全体の考古学的遺物のオンラインデータベースについて説明を受けた。イギリスの各地方が類似のデータベースを保持し、各遺跡・遺物の学術的な情報も網羅した情報網が整備されていることを知り、文化財データベースの分野におけるイギリスの先進性に日本も学ぶべきであると感じた。

ICTの文化施設への普及という意味でもう一つ印象的だったのが、博物館をはじめとする文化施設とSNSのかかわりであった。例えばMust Farmなど、調査中の遺跡においてもFacebookページを開設し即時的な広報活動を展開しており、日本との温度差を感じた。博物館・美術館に関していえば、日本は多くの施設が撮影を禁止しており、たとえば展示品の写真のSNSへの公開などはネガティブなイメージを持たれることがおおいが、イギリスでは（フラッシュ撮影は保存上の観点から禁止しているところが多いが）展示品の撮影について認めているのが普通であり、展示品写真のSNSへの掲載などはむしろ館の広報活動手助けするものとして歓迎されており、大きな認識の差異があると感じた。これは一つには、日本の文化施設は入場料を徴収し、「展示物を見る権利」を販売しているという性格が強いのに対し、イギリスの文化施設は任意の寄付を重視し「文化施設に対する共感」を一種の財源として活用しているという、両国の文化施設の経済的基盤の違いのその要因の一つがあるように思われる。ともあれ、ICTの活用という点において、イギリスははるかに進んだマインドを持っており、これは日本においても積

極的に学んでいくべきであると感じた。本プログラムの受講にあたって、イースト・アングリア大学作成のオンラインプログラムを受講したが、このような制度が日本の大学でも整備されればと感じた。ルームメイトの話ではイギリスの大学においては授業シラバス、課題、授業のハンドアウトなど学習に必要な情報はすべてオンライン上に一元化され、例えば本プログラムに参加し大学の授業を休んでいても、オンライン上の資料を参照することでそのバックアップが容易に可能だという、東京大学の例でいえば、紙の情報とオンライン情報が二元的に存在しており、オンライン上に存在しない情報が授業で示されたり配布されたりすることが多く、オンライン上で学習の遂行するのは難しい。教育の分野においても ICT 技術にかんするさらなる理解の推進が必要であると感じた。

3-3. 文化財に対する思想の違い～歴史的建造物の「再利用」を題材にして

本プログラムでは、イングランドの存在する数多くの歴史的建造物を見、学ぶ機会を経た。ローマ時代の都市の痕跡や、石造りの cathedral（大聖堂）から 8 日目に訪れたセインズベリー視覚芸術センターに代表される現代建築に至るまで、幅広い時代の建築が大火や疫病、戦火の経験にも関わらず今なおその姿をとどめていることは驚嘆であったし、そういった歴史的・文化的なモニュメントに対する社会の敬意や保存の気運が、イギリスの良き文化社会としての側面をあらわしているようにも感じられた。

建造物にまつわる事象の中で筆者が最も興味をひかれたのが、建築物を建築当時の目的とは違う視点で利用すること、いわば建築物の「再利用」がかなり人口に膾炙し洗練されていたことだった。

2 日目に訪れたテート・モダンも、もともと火力発電所として使用されていた建造物を現代美術専門の美術館として再活用している建造物であるが、発電所の無機質な外観が現代美術の価値観と絶妙に結合しており、広い内部空間を活かして大規模なインスタレーションの展示を行うなど、建物の本来の機能を十二分に美術館として活用していた。10 日目に訪れたノリッチ城博物館は元は中世の領主の館、その後は監獄として使われた歴史を持つ建物だが、そのような建造物固有の歴史も展示に取り込みつつ、芸術作品から自然史資料にいたる幅広い展示を持つ総合博物館として、多層階の構造をはじめとする建物本来の構造を十分に活かしていた。8 日目に訪れた The Library Restaurant や最終日に訪れたパブ The Adam & Eve は、建造物本来の歴史的な構造を飲食施設という目的の中で融合させようという狙いをもっていた。こうした歴史的建造物の「再利用」において、イギリスは保護・活用に纏わる法的な制度や人々の意識の高さを含めて、極めて高い水準にあると感じた。日本は文化財の保護についてはかなり先進的な地位にあると思うが、歴史的建造物の保護に関しては、例えば建て替えと保存をめぐる論争が続いている中銀カプセルタワービルのように、保存に関する助成や法的制度が十分に整備されておらず問題が起こるケースも多いように感じる。一部の専門家や保護派の人々の意識はかなり高いのだが、その意識の高さゆえに一般社会においてその意見が隔絶してしまっているかのような印象がある。

地域の歴史的建造物は地域の宝と考え、地域住民で守っていこうというイギリスの人々のような、社会全体における意識の根付きを見習うことができれば、こうした問題も今よりも容易に解決の糸口が見えるのではないだろうか。

4. 「カネ」からみた日英文化制度比較

3-1. 文化施設の入場料について

最後に、文化施設の財政にまつわる制度や風土について、気づいたことをまとめてみたい。

まず、入場料についてである。これはよく言われる話ではあるが、イギリスでは公共の文化施設において入館料（常設展入場料）が無料であることが多い。本プログラムの中で例をあげるならば、1、3 日目に訪れた大英博物館、3 日目に訪れたロンドン博物館などがそれにあたる。もちろん、無料ではなく入館料を徴収する文化施設も多くあった。そういった施設でも、前売り券や Web の申し込みで割引をしたり、時期によって入館料を変えたり（例えば、本プログラムでは訪れなかったが、キュー植物園など）、細かく入館料を細分化している。観光客などには不便なシステムかもしれないが、文化施設が来場者に与えられる「価値」が入場料の変遷という形で明確となり、来場者が入場料以上の価値を受けたと感じた場合は寄付という形で上乗せできるシステムになっている、ともいえる。寄付付きの入場券が発売されているのもこの構造を裏付けるものだろう。

日本では、一定の入館料を一斉に徴収する代わりに寄付の受付はイギリスほど顕著ではない。「入口で集める」システムということもできる。日本の美術館などで企画展が行われる場合、美術館単体では財政規模に限りがあるので、大企業とスポンサー契約を結び、有名作品の招致を行うことが多い。企業は当然営利団体であるから、招致やスポンサー契約による負担を上回る利益を出す必要性に迫られる。一定の入館料を入口で集めるシステムは、寄付などより遥かに利益回収の確実性がある方法だから、この方法を多くの美術館が採用するのは当然と言えるだろう。現に、大英博物館など入館料が無料であるイギリスの文化施設は数多くのコレクションを自ら保有し、他の美術館・博物館などから収蔵品を借りてくる必要がほとんどないから、入場料でコストを回収する必要性がそれほどないのは当然ともいえる。

ただ、一定の入館料を一斉に徴収するシステムは、美術館・博物館の文化施設として公共的性格を損なう危険性をはらんでいる。博物館法において、文化施設の必要最低限を超える入館料の徴収は禁止されている。もちろん、入館料を徴収する施設は財政的な必要に迫られてそうするのだろうが、入館料を払ってまで美術館に来るのは極めて限られた人々である。何度も足を運ぶとなれば、それは専門家か「美術好き」の人々しかいない。大英博物館での例だが、たくさんの子供たちが、所狭しと並べられた展示品を見て、目を輝かせ、楽しそうに博物館での時間を楽しんでいた。彼らは今は美術についての知識はそれほどないだろう。しかし、彼らの博物館での楽しい思い出は心の中に残り、その思い出が将来に彼らを美術や博物館の道へ向かわせるかもしれない。

公共施設である性格上、コスト回収という短期的視点ではなく、文化のすそ野を広げるという長期的な視点に立つことも重要ではないだろうか。日本の文化施設において問題だと思うのは、入館料を取ることが前提化してしまい、本来取る必要性のない展覧会においても入館料の徴収が当たり前となっている風潮があることである。

4-2. 寄付の文化

イギリスの文化施設を訪れて印象的だったのは、募金箱の多さであった。入口、出口、展示品の横やミュージアムショップ、あらゆるところに“Donate”と書かれた箱が置いてある。その種類も多様で、ただお金を入れるだけでなく、コインゲームのように子供も楽しめる要素を入れていたり、寄付すると記念バッジをくれるなど、さまざまなバリエーションがあり、さまざまな人々が寄付をしている様子が見える。

イギリスの文化施設における寄付の様子を見ていて思ったのが、日本の神社仏閣との親和性である。神社仏閣で入場料を徴収しているところは少ないが、参拝者は「お参り」という形で投げ銭をし、自然に寄付を行う。お守りやおみくじといった物品の購入も寄付のバリエーションの一部と言えるかもしれない。お守りやおみくじといった具体的なモノそのものを買うというよりは、その購入を通して、神社仏閣の持つ目に見えない「価値」にお金を払っているのである。このような日本の神社仏閣の構造はイギリスの文化施設の構造と似ている。イギリスの文化施設に寄付する人たちは、文化施設のもつ目に見えない「価値」に対してお金を払っていると言える。

日本の文化施設にも募金箱は置いてあるが、もっと数は少なく、ひっそりと置いてある様子はとても対照的であるといえる。前述のように一定額の入場料を徴収している館が多いので、実質入場料の上乗せになる寄付の収集にはあまり積極的ではないのかもしれない。4-1で述べたような、日英の文化施設の状況の差異があるとはいえ、同じ文化施設においても、置かれた社会的環境によって経済的な構造がこれほどまでに異なってくるのはとても興味深かった。

4-3. 私的な寄付の文化施設における可能性

個人的に、本プログラムの中で最も印象に残ったのが、8日目のイースト・アングリア大学視覚芸術センターの訪問であった。印象に残った理由は大きく2つある。1つはノーマン・フォスター氏設計の建築が個人的にとっても気に入ったこと、もう1つは創設者であるセインズベリー夫妻の展示における独自の思想に強い興味を抱いたことである。彼らは視覚芸術センターの展示空間を“Living Room”と名付け、美術館や博物館といった従来の文化施設とは異なる展示空間を作り出そうとした。訪問の中で、自分が気に入ったセンターの建築も、実はセインズベリー夫妻の展示における思想を色濃く反映したものだということを知り、セインズベリー夫妻の影響力の強さと文化的情熱に驚くとともに、私的な寄付の文化施設における可能性について考えるようになった。

文化施設は公共的な性格をもつものだが、そのことは文化施設の目的や意義を希薄にしてしまう可能性もある。

「公共的」という言葉に引っ張られ、目的や意義に関する議論や責任の主体があいまいになってしまうのである。昨今問題となっている新国立競技場建設をめぐる問題も、新国立競技場が持つ「公共性」にその一因があるといえるかもしれない。これに対して、視覚芸術センターのような、私的な寄付で成り立っている施設は主体が明確であり、その分独創的な発想も実現しやすい。芸術とは作り手の個人的な発想から出発する部分もあり、私的な文化施設というのはそういった芸術の個人的な側面に対して極めて親和性が高いように思われる。

もちろん、こういった私的な文化施設には問題点もある。個人的な側面に対して親和性が高い分、その受け取り方も見る人によって個人差が生じやすいということである。例えば6日目にプログラムで訪問した Dennis Severs' House は一人の好事家の男性がヴィクトリア時代の生活の忠実に再現し生活した家で、展示の性格上まさしく私的な文化施設といえるものだったが、筆者には異質な印象ばかりでセインズベリー視覚芸術研究所のような印象は全く生じなかった。一方でプログラム参加者の何人かは、プログラムで最も印象的だった施設としてこの Dennis Severs' House の名を挙げていた。とはいえ、文化が一面で個人的な性格を持っている以上、こういった「とんがった」展示の意義は少なくないと思うし、そういった展示を容易にする私的な文化施設の可能性について、もっと掘り下げてみる価値があるのではないかと思った。

4. まとめ

本稿では、「ヒト・モノ・カネ」の3つの観点から、本プログラムで学んだイギリスの文化施設・制度について、主に日本との比較の視点で述べた。正直、参加前に予想していたよりもはるかに多くのことを学び、体験し、気づくことができた。

本稿ではあまり触れられなかったが、同行した10人の大学生の参加者のみなさんとは、文化・社会・政治の話から個人的な日々の大学生活の話まで、様々な意見を交換することができた。同行の Nixon 先生、松田先生はじめ引率の教職員の方々とは、普段の大学生活よりも近い距離感で様々な話を伺うことができた。セインズベリー日本藝術研究所はじめ、何十人ものの方々から、イギリスの文化政策の現場における生の声を聞いたことは、春から院において学ぼうとしている自分にとって大きな刺激となった。

最も大きな気づきは、いかに自分が日本のこと、ひいては自分のことについて知らないかということであった。日本人の自分にとって、イギリスについて学ぶことは、裏返せばイギリスとの比較において日本について学ぶことでもある。文化理解に関する基本的な姿勢を、身をもって体感することができた。

最後に、本プログラム参加にあたりご協力いただきました、セインズベリー日本藝術研究所並びに東京大学文学部、ならびにプログラム関係者の皆さまに御礼を申し上げます。ありがとうございました。

【本プログラムの改善点・意見など】

- ・内容が過密で、参加者が食傷気味だった。もうすこし活動の数を減らし、各都市ごとに半日程度の自由時間を設けるとよいのではないかと思った。
- ・23日のフィールドワークについて、序盤に行えと、非考古学専攻者にとり遺跡などの理解が深まりよりよかったと思う。
- ・非考古学専攻者に向け、イギリスの考古学はもちろん、日本の考古学についても基礎的な知識を復習できる機会があれば、理解がより深まり良かった。(非日本人の学生に日本の考古学について質問され、返答できないことがあったため。)



初めての ウインター・プログラム

東京大学大学院人文社会系研究科・副研究科長

佐藤 宏之

人文社会系研究科・文学部が平成26年度から開始した特別プログラムは、今年度2年目を迎え、英国セインズベリー日本藝術研究所の全面的なご協力により、初めてのウインター・プログラムを実施することができた。これまで実施してきた2度の夏期特別プログラム（サマー・プログラム）はいずれも文学部が担当となり、本郷キャンパスを中心に、日本の考古学や文化遺産等に関する座学や博物館・美術館見学、グループワーク等からなる東京の部と、一転して冷涼な道東・北見市にある人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設に泊まり込み、遺跡の発掘実習や考古学遺物の整理体験、近隣博物館等の社会教育施設の見学等からなる常呂の部から構成される2週間の教育プログラムを実施してきた。

この度のウインター・プログラムは、カウンターパートであるセインズベリー日本藝術研究所が全面的に準備と周到な企画を担当していただき、きわめて充実した内容で実施することができた。その詳しい内容は本文に譲るが、40数名にのぼる応募者の中から選抜された5名の東大生にとっては、さぞかし堪能できるプログラムであったと思う。サマー・プログラム同様、東大生と欧州各地から参加した学生は、2週間にわたるプログラム期間中、宿舎では東大生と外国人学生のペアで生活を共にした。1週間のロンドンの部と、もう1週間のセインズベリーがあるイギリス南東部のノーフォーク州の部という構成も、サマー・プログラムを意識して企画されたものであろう。各地の史跡・博物館・美術館・歴史都市・発掘中の遺跡・大学等を精力的に訪問し、いずれの訪問先においても、担当学芸員や責任者から直接展示物等の解説を受けた。かの大英博物館では、バックヤードにおいて収蔵品を前にして、それぞれのセクションを担当する専門の学芸員から解説を受けるといった破格の待遇もいただいている。プログラムに参加する東大生のために、事前に5週間にわたるWEBによる予習講義をしていただく等、セインズベリー研究所のウインター・プログラムに対する熱意を強く感じている。

ほとんどフリータイムがないほどの充実したスケジュールで、参加者は少々疲労気味であったようだが、それを補って余りある内容であった。来年度以降も継続するプログラムであるが、初回としては大成功と言えよう。2週間寝食を共にした体験は、参加した東大生にとって、真の意味での国際交流を経験するまたとない機会となったと信じている。

末筆ではあるが、人文社会系研究科・文学部の関係教員・職員の皆様、特にプログラムに随行していただいた教職員の方々には、厚くお礼申し上げたい。また本プログラムを成功に導いたセインズベリー日本藝術研究所のスタッフ一同にも、深謝したい。

すでに次の夏期特別プログラムの準備は開始されている。よりよいプログラムとなるよう、試行錯誤を今後も続けていく所存である。

平成27年度
文学部冬期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2016年7月4日

印刷 三鈴印刷株式会社



東大文  SAINSBURY INSTITUTE
For the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>